

大項目 6 研究活動と研究環境

(目標)

教員が質の高い教育研究活動を遂行できるように、人的・物的・時間的な環境を整備する。

個人研究費や研究旅費を用意し、研究室を含む研究用施設・設備を整備するとともに、教育研究補助スタッフの充実を図る。また、研究活動の活性化に資するために学外からの研究受託を推進する。さらに、教員の研究活動に必要な研修機会を確保するとともに、授業や管理運営の負担が過重にならないように配慮する。

1. 学部における研究活動

(研究活動)

A群 論文等研究成果の発表状況

[現状把握]

①講演、著書・論文、制作・デザイン、個展・展覧会等

本学では、毎年全専任教員に対し研究活動業績書の提出を求めてきた。平成 16 年度からは、教育活動についても報告対象に加え、書式を「教育研究活動業績書」と変更し、過去 3 年分（平成 14～16 年度）の教育研究活動業績が教務課へ提出されている。

業績書は、「教育研究活動業績書 A（Ⅰ教育活動、Ⅱ研究活動、Ⅲ学会等および社会における主な活動）」及び「教育研究活動業績書 B（個展・展覧会、学会発表の業績）」から構成されており、提出された教育研究活動業績書から把握できる論文等研究成果の発表状況について、平成 14～16 年度までの 3 年間について集計を行った。

集計方法としては、本学専任教員を(A)美術系、(B)デザイン系、(C)講義系の 3 分野に分類し、研究内容を①講演、②著書・論文、③制作・デザイン、④個展等、⑤委員会・委嘱等の 5 つに分類した。ただし、専任教員の 3 分類は、必ずしも所属研究単位と一致するものではない。

教育研究活動業績書の提出状況は、平成 14 年度 106 人（135 人中）、平成 15 年度 106 人（133 人中）、平成 16 年度 110 人（133 人中）となり、専門分野と研究内容に関する上記分類にしたがって研究業績を集計すると、以下の結果が得られた。なお表中の数値は研究内容数、() 内は提出者 1 人あたりの平均を表している。（小数点第 2 位以下切り捨て）

平成 14 年度（106 人/135 人）

	計	(A)美術系 25 名	(B)デザイン系 53 名	(C) 講義系 28 名
①講演	95(0.8)	8(0.3)	65(1.2)	22(0.7)
②著書・論文	164(1.5)	6(0.2)	100(1.8)	58(2.0)
③制作・デザイン	110(1.0)	7(0.2)	103(1.9)	0(0.0)

研究活動と研究環境

④個展・展覧会等	163(1.5)	121(4.8)	40(0.7)	2(0.0)
⑤委員会・委嘱等	111(1.0)	18(0.7)	64(1.2)	29(1.0)

平成 15 年度 (106 人/ 133 人)

	計	(A)美術系 28 名	(B) デザイン系 72 名	(C) 講義系 33 名
①講演	125(1.1)	20(0.7)	74(1.0)	31(0.9)
②著書・論文	175(1.6)	13(0.4)	106(1.4)	56(1.6)
③制作・デザイン	83(0.7)	2(0.0)	81(1.1)	0(0.0)
④個展・展覧会等	182(1.7)	121(4.3)	57(0.7)	4(0.1)
⑤委員会・委嘱等	141(1.3)	15(0.5)	90(1.2)	36(1.0)

平成 16 年度 (110 人/133 人)

	計	(A)美術系 28 名	(B) デザイン系 72 名	C) 講義系 33 名
①講演	88(0.8)	17(0.6)	48(0.6)	23(0.6)
②著書・論文	127(1.1)	4(0.1)	74(1.0)	49(1.4)
③制作・デザイン	58(0.5)	4(0.1)	54(0.7)	0(0.0)
④個展・展覧会等	164(1.4)	116(4.1)	48(0.6)	0(0.0)
⑤委員会・委嘱等	179(1.6)	17(0.6)	106(1.4)	56(1.6)

②研究紀要

研究紀要は、研究活動の一部を外部に発信するものとしてその使命を果たしてきており、毎年 1 回 3 月に刊行している。平成 16 年度には第 35 号を刊行した。

また、平成 13 年度(第 32 号)からは、従来からある「研究論文」だけでなく、教員の制作活動を示す「制作ノート」も加えた 2 部構成となり、事務局管も美術資料図書館から教務課へ移管している。

投稿の流れとしては、まず投稿予定者が 6 月中旬～7 月初旬にかけて論文の概要(制作ノートの場合は制作領域)等を記載した登録票を教務課へ提出する。これは、編集委員会が編集作業をスムーズに行うために提出してもらうものであり、実際原稿は、8 月中旬～9 月初旬の間に完全原稿として提出され、編集作業を進めていくことになる。

研究論文の投稿資格については、専任教員(教授、助教授、専任講師)、助手、名誉教授、客員教授及び非常勤講師となっている。一方、制作ノートについては、編集委員会の特別企画として、編集委員会からの依頼として専任教員、客員教授の原稿が載せられている。

平成 14 年度から平成 16 年度まで 3 年間の研究論文名・執筆者、制作ノート作者及び編集委員は、本項目末の資料を参照。

〔点検・評価〕

①講演、著書・論文、制作・デザイン、個展・展覧会等

研究業績の集計表を見ると、例年、(A)美術系教員は④個展・展覧会等が、(B)デザイン系教員は②著書・論文及び③制作・デザインが、(C)講義系教員は②著書・論文が、それぞれの研究活動の中心となっていることが分かる。デザイン系教員においては、制作・デザイン活動と並行して著書・論文（新聞、雑誌記事含む）数の多さも特記すべき事項である。本学のような美術大学教員の研究活動は、個展・展覧会等の開催、制作・デザイン活動だけでなく、著書・論文を中心とした研究活動等多岐にわたる研究活動が展開されており、総合的な評価がなされるべきである。

問題点としては、その研究業績書を期日までに提出していない教員が少なからずいることである。

本学に所属する教員が1年間にどのような研究活動が行なってきたのか、業績書の提出を求めることにより大学はその概要を把握する事が出来る。教員にとっても自己の研究活動を点検評価することにより、いかに教育活動へ還元されているかを知る機会ともなる。専任教員全員が研究業績書を提出するべきだと考える。

②研究紀要

平成16年度研究紀要編集委員会は、平成16年3月、学長から以下の諮問を受けた。

『「武蔵野美術大学研究紀要」の今後のあり方について、現状の問題点や課題を検討し、次の事項を含めて審議いただきたい。1.制作ノートについて、2.大学院生（博士後期課程を含む）の投稿について』

学長からの諮問に対し、編集委員会は審議を重ね、次のとおり結論を得たので答申を行った。

- ・制作ノートは数年間、編集委員会の特別企画として、編集委員会からの依頼原稿として載せられてきたが、今後もこれを継続することが良いという結論に達した。また、今後は、研究論文・制作ノート双方とも学内公募にするとの結論に達した。
- ・大学院生の投稿に関して討議を重ねた結果、当大学の研究紀要は、大学の教員の研究または制作活動の発表の場とすることが望ましい、研究紀要には大学院生の論文は含めない方が良い、という結論に至った。但し、付記に大学院生等の制作、研究活動を主とした別の趣旨による刊行物の発刊は必要であるとの意見が並行して出された。

③研究集会

研究集会は、共同研究助成グループや在外研究員として派遣された教員が、その研究成果を発表する場として主に位置づけられている。

実施時期は、前期、後期各1回で、前期は6月下旬～7月上旬、後期は11月下旬～12月上旬頃開催される。

参加対象者は、原則として専任教員、非常勤講師、助手、教務補助員、職員となるが、テーマによっては、学生の参加も認めている。

平成14年度から平成16年度まで3年間の発表内容等は、本項目末の資料のとおり

である。

③研究集会

研究集会での発表者は、教授会等で募集するがあまり良い反応は得られない。締め切りまでに応募者がいない場合、共同研究助成グループや在外研究員として派遣された教員に発表の依頼をすることになる。また参加者についても、教授会での案内、回覧及びポスター等で参加を呼びかけているが、平均すると35～50名前後と少ないのが現状であり、特に専任教員の参加が少ないのが気になる。

研究集会の参加者を増やし、いかに活性化していくかが最重要課題である。

[改善・改革方策]

①講演、著書・論文、制作・デザイン、個展・展覧会等

専任教員全員が研究業績書を提出するよう徹底する。提出されていない教員へは、現在でも督促しているがその効果は限られている。提出率を上げるには、未提出者の氏名を教授会等で公表すること等も検討すべきだろう。

また各教員の研究業績については、受験生、父兄、美術館・博物館、地域、他大学及び企業等広く学外に周知していくことが望ましい。その為にも教務部と企画部で連携をとりつつ、「大学ホームページ等を通じて公開すること」を前提に、必須項目とその見せ方の検討を早急に進めるべきだろう。

②研究紀要

制作ノートは、平成17年度(第36号)から学内公募とするに当たり、新たに助手も対象に加えることになった。しかし、非常勤講師については、在籍者が658名(平成16年5月1日現在)おり、さらに公募初年度ということもあって投稿者数を予測できないことから、ひとまず投稿対象から除くこととした。投稿者数によっては、今後非常勤講師も対象に加えるかどうか編集委員会で検討していく事になるだろう。

また、平成16年度研究紀要編集委員会は、「武蔵野美術大学研究紀要編集委員会規則」(平成17年4月1日施行)を定め、大学における委員会の立場を明確にした。委員会規則第4条には、委員会の検討事項として、(1)論文等の募集及び掲載の可否に関する事項、(2)研究紀要の編集及び刊行に関する事項、(3)その他必要な事項を検討し決定すると規定されている。

さらに「武蔵野美術大学研究紀要編集要項」及び「武蔵野美術大学研究紀要執筆要領」の整備も編集作業と並行して編集委員会で進めている。

③研究集会

研究集会は昭和57年7月に第1回目が実施され、以後現在に至るまで22年間行われてきた実績があり、その成果を考えると今後も継続して開催していくべきだと考える。研究集会を活性化していくためには、共同研究助成グループや在外研究員の報告だけでなく、個人又はグループによる自主的研究活動・成果の発表、新任教員の研究紹介の場としてもどんどん活用し、発表者の対象を広げていくことが必要だと考える。ま

た専任教員については、研究集会への参加を義務づけて行くべきだろう。

(教育研究組織単位間の研究上の連携)

A群 附置研究所とこれを設置する大学・大学院との関係

[現状把握]

現在までのところ、本学には附置研究所を設置していない。

2. 学部における研究環境

(経常的な研究条件の整備)

A群 個人研究費、研究旅費の額の適切性

B群 共同研究費の制度化の状況とその運用の適切性

[現状把握]

①個人研究費

個人研究費については、本人の専門分野における研究課題に資する経費に当てるため、専任教員・助手個人に対して一律年間 300,000 円が支給されている。

支給に当たっては、本人からの申請書の提出に基づき、給与振り込み口座へ振り込む。個人研究費の使途範囲については特に制限がないが、経理上の取扱いは、個人所得の扱いとなり、所得税の課税対象となる。

平成 16 年度の支給総額は、「専任教員に配分される研究費（大学基礎データ表 29）」によると 54,900 千円となっている。申請が遅れている教員には教務課より連絡しているので、専任教員及び助手全員合計 183 名が受給していることになる。

②学会出張補助

学会出張補助については、「学校法人武蔵野美術大学学会出張補助基準」により、次のように定められている。

「本学の専任教員が学会に出席するため出張する場合及びこれに準ずる出張をする場合には、本学旅費規則に定める基準により、交通費及び宿泊料を補助する。(第 1 条)」「補助限度額は、年間 91,000 円とする。(第 2 条)」

学会出張補助は、学会への出席だけでなく、本人の作品が出品される展覧会への参加も学会に準ずる出張として補助対象としている。また、海外で開催される学会、展覧会についても学会出張補助として適用させることが可能である。申請の際には学会、展覧会等の名称、日時が分かる資料（パンフレットのコピー等）を添付する必要がある。

なお「専任教員の研究旅費（大学基礎データ表 30）」によると、平成 15 年度支給件数は、国外 5 件、国内 42 件の計 47 件、支給総額は 3,120,960 円である。

③共同研究助成費

本学の共同研究とは、「武蔵野美術大学共同研究助成取扱基準」によると専任教員が特定の研究課題について本学の自主性の下にプロジェクト・チームを編成し、学内において共同して行う研究並びに国内外の大学等と共同して行う研究をいう。(第2条)

申請から助成までの流れは次のとおりである。

研究代表者である専任教員は、申請書に共同研究計画書を添えて、教授会で提示した申請期日までに学長に提出する。学長は、審査を行うため共同研究助成審査委員会を教授会に設置し、助成申請している研究の代表者及び研究分担者以外の教授会構成員の中から、審査領域を踏まえて、3名の審査委員を任命する。

審査委員会は、研究計画及び研究費目等の審査を行い、その結果を学長に報告する。学長は、その報告を受け、教授会の議を経て、共同研究助成の決定を行う。

助成を受けた研究グループは、共同研究助成の対象となった年度から3年以内に、本学研究紀要や学術誌への掲載、図書の刊行、公開の場所における展示等の方法により研究成果を公表する必要がある。

「学内共同研究費(大学基礎データ表31)」によると、平成15年度新規件数7件、継続件数5件の計12件の共同研究のグループが助成を受けている。

平成14年度から平成16年度までの研究の概要は、本項目末の資料のとおりである。

④在外・国内研究員

本学専任教員の学術研究及び教授能力の向上を目的として「武蔵野美術大学在外・国内研究員等規則」が定められている。この規則によると、在外・国内研究員等とは、A.在外研究員、B.海外研修者、C.国内研究員に区分され、その用語の定義は次のとおりである。

- A.在外研究員 その専攻する分野について研究させることを目的として、本学の経費により、海外に派遣される専任教員
- B.海外研修者 日本政府、外国政府、内外公私の団体その他の者からの給費又は自費をもって、その専攻する学問分野についての研究、学会出席、又は海外事情調査等のため、大学の承認を得て海外で研修する専任教員
- C.国内研究員 その専攻する分野について研究させることを目的として、国内で研究に専従する専任教員

在外研究員は、派遣期間が6ヵ月以上1年以内の長期在外研究員と派遣期間が3ヵ月以上6ヵ月以内の短期在外研究員に分けられ、毎年長期2名、短期2名を派遣する。ただし、在外研究員の派遣計画によっては、長期1名を短期2名へ、短期2名を長期1名に変更することができる。

応募する資格要件としては、長期が在職満5年以上、短期が在職満2年以上の専任教員となっている。在外研究員は、教授会の議に基づき、学長が任命する。在外

研究費は、目的地までの往復の交通費及び1日8,400円の滞在費が支給される。

海外研修者は海外研修計画書を提出し、教授会の議を経て学長の承認を得る必要がある。研修期間は1年以内とし、事情により必要経費が補助される。経費補助を受けられるのは3年に一度であり、専任教員は交通費及び滞在費合計額の35%、助手はその合計額の50%となっている。

国内研究員も、在外研究員と同様、長期と短期に分けられ毎年1名ずつ派遣される。国内研究員へは、月額26,000円の国内研究費を支給する。また平成8年7月開催教授会において、平成9年度から「150万円を上限として、研究計画に応じ旅費・滞在費について研究助成を行う」ことが決定されている。「専任教員の研究旅費（大学基礎データ表30）」によると、平成15年度長期・短期在外研究員及び海外研修者への支給総額は、20,826,550円である。

平成14年度から平成16年度までの在外・国内研究員、海外研修者は、本項目末資料のとおりである。

[点検・評価]

①個人研究費

個人研究費については、個人の研究活動を進めるにはほぼ適正な額と言える。

本学の個人研究費は、「個人所得」の扱いとしているので、支給に当たって特に審査をしていない。使途範囲については制限を設けていないので、自由度が高く年度末に領収書の提出も求めている。問題点としては、各教員が1年間に行った研究活動内容、研究費の使途、研究成果等について報告書を提出する必要がないことである。それでは個人研究費が本人の研究活動を遂行する上でどの程度寄与したのか全く把握することができない。

会計監査で公認会計士より、個人研究費の支出根拠を明確にするよう指摘を受けており、早急な規則化が求められている。

②学会出張補助

専任教員及び助手合計183名のうち、学会出張補助申請をした者は47名にすぎない。申請者は全体の約25%強である。

学会出張補助の適用範囲は、本来の学会への出席だけでなく、本人の作品が出品される個展・展覧会等への参加も補助対象としており、また国内だけでなく海外への学会出張にも補助している。申請人数を見る限りでは、学会出張補助が有効に活用されていないと言えるだろう。

③共同研究助成費

例年、予算額を超える共同研究助成費の申請がなされる。各研究について、本学が助成することが適当な研究か、共同研究としてふさわしいテーマ及び内容か、また研究の独自性・具体性の点からも助成審査委員会で審査を行う。その上で、助成額の圧縮、研究支出項目の見直し等を研究者に提示し、研究を遂行できるか、あるいは研究内容の部分的変更が可能か調整することになる。

助成期間は、1年を原則とするが、研究内容により複数年にわたって研究期間が必要とされる場合には、審査の上、助成期間が延長される。しかしながら、申請はしてみたものの1年間全く研究が進んでいないケースも散見されることが問題点として挙げられる。

また研究成果については、共同研究助成の対象となった年度から3年以内に公表が義務づけられているが、積極的に公表がなされていない。

④在外研究員・国内研究員

在外・国内研究員規則によると、「帰国後2ヵ月以内に、在外・国内研究員は研究経過報告書を、また海外研修者は、研修報告書を学長に提出しなければならない。」となっているが、A4判1枚程度の報告書で終わってしまうことも多く、派遣期間における研究内容の詳細を知ることはできない。また、在外研究での研究成果がどのような形で研究及び教育に寄与されるのか、明確に分からないことが多い。

[改善・改革方策]

①個人研究費

個人研究費は、今後とも継続して支給していくことが望ましい。しかしながら、個人研究費を支給している以上、どんな研究活動をされたのか、その研究内容・研究成果等については毎年度報告書を提出してもらう必要があると考える。また規則の制定に当たっては、教務部だけでなく、総務課及び経理課との検討・調整が必要だろう。

現在一律に同額（300,000円）となっている支給額については、研究成果に応じて研究費を増額する助成方法が今後望ましいのか、あるいは可能なのかについても、まずは教学スタッフで検討していく必要があるだろう。

②学会出張補助

補助申請する教員は毎年固定化してしまうが、学会に所属していない教員も出張補助を展覧会等で展示する際の補助として活用するべきであろう。近年海外での学会開催あるいは展覧会展示のために申請されることも増えて来たが、利用状況等を勘案すると、補助限度額については、ほぼ適正な額と言える。

③共同研究費

申請のあった計画書の段階では、審査委員としても1年間にどれ位研究が遂行されるのか判断するのは難しい。半年経過時点で、研究の進捗状況を中間報告として提出を求めることも考えられる。

研究成果の公表については、日本私学事業団による「補助金事前調査」において、少なくとも「研究紀要」レベルの刊行物への掲載が望ましいと指摘されている。

安易な申請を防ぐ意味でも、研究成果を公表できなかった場合には、理由書を提出すること、また教授会等での詳細な報告も求めていくべきだろう。それには共同研究成果を正當に点検・評価するシステムの整備が必要であると考えられる。

また私学事業団の共同研究補助を受けるためにも、産業界、国内外の大学等、及び

学内の学科間等にまたがる共同研究を積極的に推進していくことが必要だろう。

④在外研究員・国内研究員

在外研究員や国内研究員として派遣された教員は、最低でも3か月以上は大学を離れて研究に専念することが出来る。派遣期間の研究成果を報告する「研究経過報告書」の内容は充実させていく必要があり、そのためには記載項目や枚数の指定等条件付けが必要だろう。

また在外・国内研究員規則第12条により研究成果を公表することになっているが、教授会での簡単な口頭報告だけになってしまうことも多く勿体ない。講義形式での発表だけでなく、美術大学らしく美術資料図書館での公開展示等、広く学内外に研究成果の公表をすべく徹底していくべきだろう。

(競争的な研究環境創出のための措置)

C群 科学研究費補助金及び研究助成財団などへの研究助成金の申請とその採択の状況

[現状把握]

①文部科学省等科学研究費補助金

科学研究費補助金については、文部科学省及び日本学術振興会から来年度の公募通知があった後、教授会で全専任教員に対し学内締め切りを設けて申請を呼び掛けている。申し出のあった教員には、補助金公募要領、研究計画調書作成・記入要領を手渡し、申請を促している。

本学の専任教員が研究代表者として、科学研究費補助金を申請している件数は、下表のとおり平成14～16年度までの過去3年間で新規7件、継続6件計13件である。このうち、採択された件数は、新規3件、継続6件の計9件となっている。補助金額は記載のとおりである。種目別に見ると、基盤研究(B)が柱になっている。ただし、本学の専任教員が研究分担者として科学研究費補助金を受けた共同研究に参加していることもあるが、ここでは取り上げていない。

科学研究費補助金申請採択状況(平成14年度～平成16年度)

年度	申請件数			採択件数			採択率(採択件数/申請件数)			補助金額(千円)		
	新規	継続	合計	新規	継続	合計	新規	継続	合計	新規	継続	合計
平成14年度	1	1	2	1	1	2	100%	100%	100%	1,000	2,600	3,600
平成15年度	2	2	4	1	2	3	50%	100%	75%	6,300	4,100	10,400
平成16年度	4	3	7	1	3	4	25%	100%	57%	5,000	7,600	12,600

※研究成果公開促進費及び特別研究員奨励費を除く

研究活動と研究環境

平成 14 年度から平成 16 年度までの採択された研究は、本項目末の資料のとおりである。

②委託研究費

平成 16 年 2 月 1 日から法人事務部に研究支援センターが設置されると共に、「学校法人武蔵野美術大学産官学共同研究規則」が施行され、(1)産官学共同研究についての契約、経費管理及び支援に係る業務、(2)産官学共同研究を含む研究支援に関する企画調査に係る業務を担当することとなった。また、学長の指名する教職員で構成する産官学共同研究推進委員会が設置され、(1)産官学共同研究の企画調査に関する事項、(2)産官学共同研究のコーディネート、契約、報告及び広報の実務に関する事項、(3)その他必要な検討事項を検討することとなった。

平成 15 年度及び平成 16 年度のプロジェクトは、本項目末の資料のとおりである。

[点検・評価]

「教員研究費内訳(大学基礎データ表 32)」を見ると、研究費総額が年を追って増加している。これは学外からの研究費拡大を示しており、平成 13 及び 14 年度の学外研究費が研究費総額に占める割合は 10%前後だったものが、平成 15 年度には 26%余りまで伸びたことでも分かる。

その平成 15 年度の学外研究費のうち、産官学共同研究費が 14,000,000 円（研究費総額に対する割合が 15.1%）となり、科学研究費補助金の 10,400,000 円（研究費総額に対する割合が 11.2%）を上回った。学外からの研究費の増加は、産官学共同研究費の獲得に拠る所が大きい。科学研究費補助金については、平成 15、16 年度と補助金額を増加させているが、一方で新規申請件数が少ないこと、そして実際に科学研究費補助金を獲得しているのは、特定の教員に限られているという状況がある。

[改善・改革方策]

本学の教育研究活動の一層の充実を図るためには、科学研究費補助金を獲得し、資金を有効活用することが不可欠となる。そもそも科学研究費補助金への申請が増えなければ、更なる資金の獲得は難しい。広く学内に情報提供し応募を求めるのは当然のこととして、全専任教員が競争的外部資金獲得に向けた明確な目的意識を持つことが必要であると考えます。

また、科学研究費の申請はしたが採択されなかった教員に対し、新たな研究費の支給として「奨励研究費」の創設を検討してはどうだろうか。産官学共同研究を進めるに当たっては、日頃から国、地方自治体、法人、個人との関わりを持つ努力が重要である。大学として、外部資金獲得に向けた積極的な取り組み姿勢を明確にするべきだろう。

今後は「研究」活動だけでなく、教育方法の改善や教材の開発等「教育」活動についての補助金についても獲得を目指していくべきであり、学内においても教育活動を支援する「教育活動支援費」の創設が望まれる。

(経常的な研究条件の整備)

A群 教員個室等の教員研究室の整備状況

[現状把握]

「教員研究室(大学基礎データ表 35)」のとおり、専任教員はすべて個室の研究室が配当されている。個室の1室当たりの平均面積は24㎡で、共同研究室を含めた教員1人当たりの平均面積は51.5㎡となる。個人研究室には、空調、電話、インターネットが接続可能な環境が整備されており、常時使用が可能である。標準的な備品は、机、いす、本棚、パソコン等である。

[点検・評価]

教員個室等の教員研究室は全員個室化が完了している。しかし、スペース、設備、備品等に個人差が生じている場合がある。

[改善・改革方策]

教員個人研究室のスペース、設備、備品、そして環境面も含めた不公平感がない統一が望まれる。なお、平成20年3月完成予定の2号館(アトリエ棟)に個人研究室が配置されることから、多少なりとも個人差の解消が図られる予定である。

(経常的な研究条件の整備)

A群 教員の研究時間を確保させる方途の適切性

A群 研究活動に必要な研修機会確保のための方途の適切性

[現状把握]

1週間当たりの授業担当時間数は、「学校法人武蔵野美術大学服務規則」により実習科目担当教員は20時間、演習科目担当教員は12時間、講義科目担当教員は10時間と規定されている。この授業担当時間数は服務上の時間数の定めであり、実際の担当時間数は学科によってあるいは個々の教員によって異なっているのが現状である。近年は特に授業だけでなく、入試関連業務、各種委員会の会議等学内運営に費やす労力と時間が増大している。

[点検・評価]

教員の負担は、授業時間数には表れてこない学生への指導時間や各種委員会等業務を考慮しないと全体が見えてこない。

さらに学長補佐、教員部長等の役職兼務者については、各種会議等学内運営に費やす時間が増えており、教育研究時間の確保が困難になって来ている。

[改善・改革方策]

研究活動と研究環境

専任教員のうち、学長補佐、教員部長等の役職を兼ねるものについては、授業担当時間の減免を行う配慮をしている。

授業時間以外の各種業務については、特定の教員に委員会委員が集中しないよう負担の平等化が求められる。また併せて会議等の効率化、その運用の在り方も検討していく必要があるだろう。

研究時間を確保するための制度として、前述したように在外・国内研究員制度、学会出張補助制度がある。

(研究上の成果の公表、発信・受信等)

C群 研究論文・研究成果の公表を支援する措置の適切性

[現状把握]

本学専任教員が研究成果を出版する際に助成する出版助成制度があり、その対象及び金額は次のとおりである。

①定年に達する、あるいは定年間近の講義系科目担当教員、または在職 20 年を過ぎた講義系科目担当教員に対しては、一般学術図書の出版に際して、金額の上限を 150 万円として助成を行う。

②実技系科目担当教員で、退職時に美術資料図書館で展覧会を行わず、作品図録を出版する場合は、金額の上限を 200 万円として助成を行う。

また、助成の条件として、助成された年度内に出版ができること、また助成は当分の間 1 人 1 回に限っている。

平成 14 年度から 16 年度までの出版助成の対象者は、本項目末の資料のとおりである。

[点検・評価]

この出版助成制度は、基本的には定年に達する、あるいは定年間近の専任教員を対象としている。

株式会社武蔵野美術大学出版局（本学が 100% 出資）にて廉価に学術書を出版することは可能であるが、専任教員全員を対象とした学術図書刊行を助成する制度は本学では持っていない。

[改善・改革方策]

専任教員が研究成果を出版する助成制度として、著作・論文等を廉価に出版できるだけでなく学術的価値が高い著作だが、出版の困難な研究成果の発表について助成の対象とする「研究成果出版助成費」等の創設を検討しても良いだろう。

3. 大学院における研究活動

(研究活動)

A群 論文等研究成果の発表状況

[現状把握]

本学では、大学院専任教員はおらず、造形学部の専任教員が大学院の授業を兼担しているため、造形学部の現状把握に準ずる。大学院教員として独立して論文等研究成果の発表は行っていない。

[点検・評価]

本学では、大学院専任教員はおらず、造形学部の専任教員が大学院の授業を兼担しているため、造形学部の点検・評価に準ずる。

[改善・改革方策]

本学では、大学院専任教員はおらず、造形学部の専任教員が大学院の授業を兼担しているため、造形学部の改善・改革方策に準ずる。

(教育研究組織単位間の研究上の連携)

A群 附置研究所とこれを設置する大学・大学院との関係

[現状把握]

現在までのところ、本学大学院には附置研究所を設置していない。

4. 大学院における研究環境

(経常的な研究条件の整備)

A群 個人研究費、研究旅費の額の適切性

A群 教員個室等の教員研究室の整備状況

A群 教員の研究時間を確保させる方途の適切性

A群 研究活動に必要な研修機会確保のための方途の適切性

B群 共同研究費の制度化の状況とその運用の適切性

(競争的な研究環境創出のための措置)

C群 科学研究費補助金及び研究助成財団などへの研究助成金の申請とその採択の状況

(研究上の成果の公表、発信・受信等)

C群 研究論文・研究成果の公表を支援する措置の適切性

[現状把握]

本学では、大学院専任教員はおらず、造形学部の専任教員が大学院の授業を兼担しているため、造形学部の現状把握に準ずる。

[点検・評価]

研究活動と研究環境

本学では、大学院専任教員はおらず、造形学部の専任教員が大学院の授業を兼担しているため、造形学部の点検・評価に準ずる。

[改善・改革方策]

本学では、大学院専任教員はおらず、造形学部の専任教員が大学院の授業を兼担しているため、造形学部の改善・改革方策に準ずる。

資料1 平成14年度から平成16年度研究紀要の研究論文名・執筆者、制作ノート作者および編集委員

○平成14年度研究紀要

<論文一覧>

論文名	執筆者
・フランソワ・モーリアックにおける「獣」のイメージ	藤田尊潮
・研究論文の導入部のジャンル分析 －建築学の分野の分析を証拠として－	ポール カンダサミ
・過程を表すフランス語名詞文について	川島浩一郎
・視知覚的事象学 (Visio-Perceptual Eventology) への接近／試論 (4) －言語デザイン (Language Design) としてのプログラミング言語 (Programming Language) におけるイベント (Event) 概念の諸相の考察－	川島重治
・芸術・科学・技術の創造的出会いを求めて －学生の意識調査による比較研究－	圓山憲子・逢坂卓郎・ 栗屋容子・齋藤嘉博・ 松居ユリ
・《i-art》論－現代アートの民俗③	中島智
・粒度分布から見たピアンコ・サン・ジョヴァンニ	大野彩
・オランダ東インド会社文書における肥前磁器貿易史料の基礎的研究 －1650年代の史料にみる医療製品取引とヨーロッパ陶磁器の影響－	櫻庭美咲
・身体の形態と機能とデザインとの関係を計測機器を用いて検証する 基礎的研究 ドアーの開閉にともなう手の機能とその関係について (I)	真田日呂史・ 森江健二・ 安部泰人
・アメリカ合衆国におけるヘイト・スピーチ規制立法をめぐる議論 －「文化戦争」と公権力の責任－	志田陽子
・情報デザイン (5) ,対話行為とインタフェース・デザイン －認知発達における対話行為、言語学における対話分析	下村千早
・狭小空間「ハット・環具」の研究 －環具：家具環境からの形成／家具と建築の一体化	寺原芳彦・島崎信・ 椎名純子・中村万里・ 足立正・落合勉・ 山口泰幸・山田佳一朗・ 山口由加里・上村晴彦・ 滝田智美・鈴木友子

<制作ノート>

遠藤彰子、久野和洋、水上泰財

編集委員

栗屋容子、岡部あおみ、北澤洋子、今野勉、高市美千佳、田中秀穂、長澤忠徳、袴田京太郎、上野芳朗

研究活動と研究環境

○平成 15 年度研究紀要

<論文一覧>

論文名	執筆者
・ 広告色彩評価に関する先見的研究 － 日中台韓学生は広告の色彩表現をどう評価するかを予測する－	千々岩英彰・王超鷹・ 宋璽徳・申熙卿・ 崔貞伊・白石学
・ <目に見えるもの>と<目に見えないもの> － 『星の王子さま』再読	藤田尊潮
・ 日本語の促音音素 /q/ と中和について	川島浩一郎
・ 狂気のドラマツルギー	小石新八・内村世紀
・ <脱＝民俗学>としてのフィールドワーク － 宮本常一論の視座－	中島智
・ 伝統と刷新：屋台食に見る共進会の精神	大木理恵子
・ ミュージアム・イベントについての一考察 － 実演芸術系の事業を中心に－	恩地元子
・ 伝統的襖絵のデジタル復元手法の研究	杉本賢司
・ 川村清雄作「振天府」の制作過程について－資料からの一考察－	竹中直
・ 近代名作椅子の嗜好性と評価分析の基礎的研究『武蔵野美術大学近代 椅子コレクション『名作椅子 130 脚に座る』－椅子デザインの系譜と 座り心地－』展一般来場者アンケートより	島崎信・寺原芳彦・ 朝山隆・足立正・ 新見拓也・鈴木友子・ 山田佳一郎・中野公力
・ 「桃山」イメージの創出－昭和戦前期の古陶磁愛好誌に探る	富田康子
・ 洞窟のマレーヴィチー芸術宗教学に向けて	山口拓夢
・ 打具におけるリストトルクの比較検討－野球とゴルフの特性について	山本唯博・白善美・ 水口潔・小倉貢・ 青山晴雄

<制作ノート>

遠藤竜太、池田良二、井上（三浦）耐子、伊藤誠、黒川弘毅、最上壽之、那須勝哉、滝沢具幸、
内田あぐり、柳澤紀子

編集委員

栗屋容子、遠藤竜太、大平智弘、北澤洋子、今野勉、田中秀穂、藤田尊潮、三浦耐子、稲葉直

○平成 16 年度研究紀要

<論文一覧>

論文名	執筆者
・「undirected 1992-2002」の制作過程	クリストフ・シャルル
・『現代批評理論』における「慣習」概念の諸相	金子伸二
・舞台美術家・伊藤熹朔の舞台装置原画を読む	川口直次・多田忠弘・ 小石新八
・聖母の子宮ーベッカフーミ作《三位一体と聖者たち》をめぐる試論	松原知生
・アートの極東ーリージョナルな美学のための芸術人類学序説ー	中島智
・古代ローマ壁画の技法に関する実験と考察	大野彩・鈴木忠
・時代とジェンダーからみた〈シルバニアファミリー〉1985-2004	大木理恵子
・「言語の誕生」	島州一
・狭小空間「HUT-2」の研究 空間の家具化/KD（ノックダウン）システムの可能性	寺原芳彦・足立正・ 山口泰幸
・董源と其の時代の絵画をめぐって	王凱
・情報科教育におけるデザイン概念の有用性の考察	八重樫文
・両手リストのトルク測定に関する研究ーグリップの4段階姿勢の検討ー	山本唯博・白善美・ 水口潔・小倉貢・ 青山晴雄

<制作ノート>

原一史、小井土満、甲田洋二、峰見勝蔵、大浦一志、斎藤國靖、鈴木民保、多和圭三、戸田裕介

編集委員

栗屋容子、田中秀穂、遠藤竜太、藤田尊潮、北澤洋子、今野勉、三浦耐子、大平智弘、野中剛

資料2 平成 14 年度から平成 16 年度研究集会の発表内容

○平成 14 年度研究集会

- ・開催日<前期>平成 14 年 7 月 4 日（木）

<後期>開催無し

- ・会場 本学 9 号館 2 階 205 教室

- ・内容<前期>

研究発表①「美術と科学の創造的出会い（その共通言語の探求）」について

発表者：逢坂卓郎 教授 空間演出デザイン学科

研究発表②「美術館など文化施設の運営調査研究」について

発表者：岡部あおみ 教授 芸術文化学科

研究発表③「3Dモデリング研究」について

ー三次元 CAD データから造形装置（光造形機・紙積層造形機）を使用して立体モデルを制作するための研究ー

研究活動と研究環境

発表者：宮島慎吾 教授 基礎デザイン学科

研究発表④「山形金属工芸とネパール金属工芸の比較研究Ⅳ」について

発表者：小井土満 教授 共通デザイン研究室

○平成 15 年度

・開催日<前期>平成 15 年 7 月 3 日 (木)

<後期>平成 15 年 12 月 4 日 (木)

・会場<前期>本学 12 号館 2 階 201 教室

<後期>本学 9 号館 2 階 205 教室

・内容<前期>

研究発表「日中台韓の美大生は色をどう感じているか」

－平成 14 年度、本学（共同研究）及び吉田秀雄記念事業財団の助成研究で明らかにできたこと－

発表者：千々岩英彰 教授 一般教育研究室

<後期>

研究発表「E-learning 地図の伝送」

－通信教育における、インターネットを活用した新しいデザイン教育の実践－

発表者：陣内利博 教授 視覚伝達デザイン学科

○平成 16 年度

・開催日<前期>平成 16 年 6 月 28 日 (月)

<後期>平成 16 年 11 月 25 日 (木)

・会場<前期>本学 12 号館 8 階第 1 会議室

<後期>本学 9 号館 2 階 211 教室

・内容<前期>

研究発表「産学共同研究プロジェクトについて」

－「N プロジェクト」日産自動車（株）の事例－

発表者：宮島慎吾 教授 基礎デザイン学科、

真田日呂史 教授・森江健二 教授・中原俊三郎 教授 工芸工業デザイン学科

<後期>

研究発表「学生による授業評価について」

発表者：森山明子 教授・今泉洋 教授 デザイン情報学科、

戸田裕介 助教授 共通彫塑研究室、花光里香 助教授 外国語研究室

資料 3 平成 14 年度から平成 16 年度までの学内共同研究の概要

※表記がないのは本学専任教員、他大学等の研究者の肩書きは当時のもの。

(助) は助手、(講) は非常勤講師、(特) は特別講師、(教) は教務補助、(職) は事務職員、(嘱) は嘱託を表す。

○平成 14 年度新規

- 【研究代表者】 及部克人
 【研究分担者】 池田良二、新正卓、柏木博、小久保明浩、朴亨國
 【研究課題】 白牛会（在東京美術協会）に集う朝鮮からの留学生たち～帝国美術学校の歩みと東アジア美術の動向
- 【研究代表者】 寺山祐策
 【研究分担者】 新島実、小林昭世、加藤賢策（助）、本庄美千代（職）
 【研究課題】 エル・リシツキーを軸としたモダンタイポグラフィデザイン研究
- 【研究代表者】 島崎 信
 【研究分担者】 寺原芳彦、朝山隆（講）、足立正（講）、山田佳一朗（助）、野呂影勇（早稲田大学人間科学部・理工学総合研究センター教授）、寺岡拓（早稲田大学理工学総合研究センター客員研究助手）、織田憲嗣（北海道東海大学芸術工学部デザイン学科教授）
 【研究課題】 本学美術資料図書館館蔵の「近代椅子デザインコレクション」の充実した系統的収集計画の研究・立案と、収集品に関する技能研究及び関連資料の収集とそのインデックス化
- 【研究代表者】 川口直次
 【研究分担者】 小石新八、大抜久敏（講）、浦川明郎（講）、福田寿寛（助）、多田ヒロシ（舞台美術家）、黒田浩一郎（フリーカメラマン）
 【研究課題】 日本近代舞台美術の第一人者伊藤熹朔の作品記録として画像記録化
- 【研究代表者】 立花直美
 【研究分担者】 宮下勇、赤塚祐二、竹中司（嘱）、小泉雅生（都立大学工学部建築学科助教授）、高間三郎（科学応用冷暖研究所所長）、中村勉（中村勉総合計画事務所所長）、小出俊弘（山武ビルシステム（株）環境技術センター次長）、野村泰子（竹中工務店FM推進本部）
 【研究課題】 キャンパスのファシリティ・マネージメントに関する研究（武蔵野美術大学のデータベース）
- 【研究代表者】 向井周太郎
 【研究分担者】 川島重治、小林昭世、網戸通夫、今泉洋、長澤忠徳、橋本梁司、末廣伸行（講）、板東孝明（講）、渡邊敏之（講）、清水恒平（助）、肴倉睦子（助）、中村恵夏（助）、栗芝正臣（嘱）、阿部卓也（東京大学大学院）、高橋洋介（（有）H.R.A リサーチャー）
 【研究課題】 <デザイン教育の資源>に関する研究-基礎デザイン学リファレンスの制作-
- 【研究代表者】 千々岩英彰
 【研究分担者】 森江健二、多賀いずみ（講）、横田久美子（助）、王超鷹（上海 PAOS NET 公司出席代表）、宋璽徳（国立台湾芸術大学助教授）、崔貞伊（忠南大学講師）
 【研究課題】 東アジアにおける色彩認知と色彩感情の交叉文化的研究

○平成 14 年度継続

- 【研究代表者】 齋藤昭嘉
 【研究分担者】 篠原規行、近岡令（講）、沖知江子（助）
 【研究課題】 アール・ヌーヴォー期における造形研究
- 【研究代表者】 今井良朗
 【研究分担者】 橋本梁司、岡部あおみ、瓦井秀和（講）

研究活動と研究環境

【研究課題】地域社会と芸術活動－実態調査研究

●【研究代表者】寺沢秀雄

【研究分担者】鶴田剛司、安原七重（講）、戸崎幹夫（講）、水谷元（講）、吉橋昭夫（多摩美術大学情報デザイン学科専任講師）

【研究課題】インターフェースデザイン研究1 ―情報機器操作におけるインタラクションのモデル化研究―

●【研究代表者】高市美千佳

【研究分担者】高藤武允、野口克洋、花光里香、P. カンダサミイ

【研究課題】学生の英会話能力向上の可能性を求めて、動詞から発想する英文作成法の研究－国際化の時代における美大での英語教育のあり方研究の一つとして－

○平成 15 年度新規

●【研究代表者】寺原芳彦

【研究分担者】椎名純子、小竹信節、足立正（講）、山口泰幸（講）、中村萬里（特）、中村路子（特）、新見拓也（助）、鈴木友子（教）、羽吉久美子（教）、山口由加里（元助）

【研究課題】現代の価値観の変化に伴う環境対応型狭小空間〈環具=HUT〉の研究

●【研究代表者】小石新八

【研究分担者】椎名純子、川口直次、大抜久敏（講）、富谷智（講）、加瀬浩嗣（講）、成田真理子（助）、加納豊美（多摩美術大学助教授）

【研究課題】舞台空間と展示空間の相互関係の研究

●【研究代表者】宮島慎吾

【研究分担者】石垣貴子、中原俊三郎、板東孝明

【研究課題】ローカルデザイン研究

●【研究代表者】藤枝晃雄

【研究分担者】白石美雪、松浦寿夫（講）

【研究課題】ブラック・マウンテン・カレッジの作家たち

●【研究代表者】玉蟲敏子

【研究分担者】長谷川堯、沢良子（東京造形大学助教授）、林道郎（武蔵大学助教授）、松崎照明（講）

【研究課題】外国人が見た日本美術に関する総合的研究－ジャポニスムから 20 世紀まで－

●【研究代表者】横溝健志

【研究分担者】後藤吉郎、白尾隆太郎、堀越洋一郎、米徳信一、井上智史（助）、小宮山博史（講）

【研究課題】デザインおよびその周辺技術のデジタルアーカイブス化－1

●【研究代表者】酒井道夫

【研究分担者】長谷川堯、小林昭世、岡村多佳夫（東京造形大学教授）

【研究課題】兩次大戦間における造形表現の古典主義の回帰傾向に関する研究

○平成 15 年度継続

●【研究代表者】寺山祐策

【研究分担者】新島実、小林昭世、加藤賢策（助）、本庄美千代（職）

- 【研究課題】 エル・リッツキーを中心としたタイポグラフィデザイン研究
- 【研究代表者】 及部克人

【研究分担者】 朴亨國、新正卓、池田良二、柏木博、小久保明浩、高島直之（講）、尹成濟（助）

【研究課題】 白牛会（在東京美術協会）に集う朝鮮からの留学生たち－帝国美術学校の歩みと東アジア美術の動向
 - 【研究代表者】 立花直美

【研究分担者】 宮下勇、赤塚祐二、竹中司（嘱）、高間三郎（(株) 科学応用冷暖研究所所長）、中村勉（中村勉設計事務所）、小出俊弘（山武ビルシステム（株））、野村泰子（(株) 竹中工務店）、小泉雅生（東京都立大学助教授）

【研究課題】 キャンパスのファシリティ・マネジメントに関する研究
 - 【研究代表者】 網戸通夫※向井周太郎教授退任により、網戸教授に代表者が交代

【研究分担者】 向井周太郎、橋本梁司、川島重治、小林昭世、今泉洋、長澤忠徳、板東孝明、末廣伸行（講）、渡邊敏之（講）、栗芝正臣（講）、肴倉睦子（助）、清水恒平（助）、高橋洋介（(有) HRA リサーチャー）、阿部卓也（東京大学大学院）

【研究課題】 <デザイン教育の資源>に関する研究－基礎デザイン学リファレンスの制作－
 - 【研究代表者】 齋藤昭嘉

【研究分担者】 篠原規行、近岡令（講）、沖知江子（助）、鄭継深（教）

【研究課題】 アール・ヌーヴォー期における造形研究
- 平成 16 年度新規
- 【研究代表者】 遠藤竜太

【研究分担者】 池田良二、柳澤紀子、高島直之（講）、朱星泰（弘益大学校講師）、滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）、ウェイン・クロザース（講）、奥山直人（助）

【研究課題】 アジア地域における版画文化と版画教育の現状
 - 【研究代表者】 小松誠

【研究分担者】 真田日呂史、磯谷慶子（講）、西川聡（講）、関根昭太郎（助）、田中啓一（教）、島田文雄（東京芸術大学美術学部工芸科教授）、井島守（佐賀県立有田窯業大学校教務部長）、外館和子（茨城県陶芸美術館副主任学芸員）、鄭寧（清華大学美術学院副教授）、李見深（景德鎮三宝陶芸研修院教授）、高振宇（中国芸術研究院 陶磁芸術研究室主任）

【研究課題】 中国における磁器の発祥から現代に至る磁器の表現の変遷と現代の世界における磁器の表現の多様性を研究（2004 年に 1000 周年記念展が開催される景德鎮窯を調査研究）
 - 【研究代表者】 小池一子

【研究分担者】 天野勝、田辺久美子、ビヴァリー・セムズ（ニューヨーク大学専任教員）、上村晴彦（助）、小西悟士（教）

【研究課題】 衣服の概念とその表現の研究
 - 【研究代表者】 板東孝明

【研究分担者】 遠藤剛（山形大学工学部教授・東京工業大学名誉教授・(社) 高分子学会会長）、吉田隆（(株) エヌ・ティ・エス 代表取締役）、永山広樹（講・宮城工業高等専門学校助教授）、風間玲子（教）、

【研究課題】 「未来材料のデザイン表現研究」先端科学（ゲノム、ナノテク等）研究から生み出

研究活動と研究環境

される新素材が未来社会形成の材料としての存在価値を想像させるための表現研究

- 【研究代表者】篠原規行
【研究分担者】板屋緑、藪野健（早稲田大学教授）、宮下晃久（助）、小川明日香（助）、村田恒（助）
【研究課題】トニーヒルズ実験映像の抽象的カメラワークを実現するための装置研究と試作研究
- 【研究代表者】岡部あおみ
【研究分担者】クリストフ・シャルル、長澤忠徳、志田陽子、白石美雪
【研究課題】芸術文化のさまざまな領域におけるジェンダー基礎研究
- 【研究代表者】柏木博
【研究分担者】北澤洋子、高橋敏夫（早稲田大学文学部教授）、木下直之（東京大学大学院人文社会系研究科助教授）
【研究課題】テクノロジーと表現
- 【研究代表者】原一史
【研究分担者】毛利伊知郎（三重県立美術館主幹（学芸員））、水上嘉久（多摩美術大学美術学部彫刻科専任講師）、竹中直（助）
【研究課題】「橋本平八」の生涯と彫刻観

○ 平成 16 年度継続

- 【研究代表者】小石新八
【研究分担者】椎名純子、川口直次、富谷智（講）、鈴木勝（講）、成田真理子（助）
【研究課題】舞台空間と展示空間の相互関係の研究
- 【研究代表者】藤枝晃雄
【研究分担者】白石美雪、松浦寿夫（講）
【研究課題】ブラック・マウンテン・カレッジの作家たち
- 【研究代表者】玉蟲敏子
【研究分担者】長谷川堯、沢良子（東京造形大学助教授）、林道郎（武蔵大学助教授）、松崎照明（講）
【研究課題】外国人が見た日本美術に関する総合的研究ージャポニスムから 20 世紀までー
- 【研究代表者】横溝健志
【研究分担者】後藤吉郎、白尾隆太郎、堀越洋一郎、米徳信一、井上智史（助）、小宮山博史（講）
【研究課題】デザインおよびその周辺技術のデジタルアーカイブス化ー1
- 【研究代表者】酒井道夫
【研究分担者】長谷川堯、小林昭世、岡村多佳夫（東京造形大学教授）、沢良子（東京造形大学助教授）
【研究課題】両次大戦間における造形表現の古典主義への回帰傾向に関する研究

資料 4 平成 14 年度から平成 16 年度までの在外・国内研究員、海外研修者

- 平成 14 年度
- < 在外研究員 >

●長期

・峰見勝藏 教授 共通絵画研究室

平成 14 年 8 月 1 日～平成 15 年 7 月 31 日 滞在期間 364 日間

イタリア (ローマ)

【研究課題】

主としてイタリア国内において、初期キリスト教美術、ビザンティン、ロマネスク、ゴシック、そしてルネッサンスと転換する時代、及びそれらの時代と絵画表現の技法、思考、表現様式の展開を見学したい。EU 諸国、ロシア、東欧へも同じ主旨で訪ね、学びたい。

【理由】

遠い昔の先人の残した作品を見て、学びたいと思っています。

十年ほど前、スペインのテイッセン美術館で、たまたまルネッサンス期以前の宗教絵画を数点見ました。稚拙な技法で、人物像は上に上に重ねられ、遠近法を持たず、ベタ塗りに近いようなテンペラ画で、素朴な見かけでしたが、高く垂直な精神性というものを感じました。作者名はありません。聞けば中世の絵画とのことでした。それ以来、機会があればルネッサンス期以前の絵画を見たいと思っていました。

イタリアを中心として、ヨーロッパ諸国で、初期キリスト教美術、ビザンティン、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンスとテンペラ、フレスコ、油彩画の技法的展開と神性の変遷とでもいうものをテーマとして見学したいと思います。

宗教に対する基礎知識、歴史社会に対する知識、言葉の能力のなさ等不安材料はありますが、暗黒といわれた中世の作品を見たいと思っています。

・鈴木久雄 教授 共通彫塑研究室

平成 15 年 3 月 20 日～平成 16 年 3 月 19 日 滞在期間 364 日間

デンマーク、ドイツ 60 日

イギリス、フランス 240 日

イタリア、スペイン 65 日

【研究課題】

「彫刻の本来部分」について、主に日・欧造形美術の対照のなかで探る。

【理由】

在職期間内の今後の教育研究活動において、現時点における前記研究課題による在外研究が必要かつ適切であると判断した為。

●短期

・青木正夫 教授 視覚伝達デザイン学科

平成 14 年 7 月 1 日～平成 14 年 9 月 30 日 滞在期間 91 日

ドイツ (ベルリン) 92 日

【研究課題】

ロシア構成主義とその周辺に与えた影響力

【理由】

ロシア構成主義の学術研究とヨーロッパ諸国に与えた様々な幾何学的、教理的構成作品の情報収

研究活動と研究環境

集と歴史的研究を主とし、他に歴史的観点からみた絵本の体系と今日の動向について研究する。

・竹山実 教授 建築学科

平成 14 年 4 月 1 日～平成 14 年 8 月 31 日 滞在期間 152 日間

カナダ (バンクーバー) 61 日

アメリカ (ボストン) 26 日

デンマーク (コペンハーゲン) 66 日

【研究課題】

- 1) パナキュラーな建築形態とその集合形式について (観察と資料収集)
- 2) 海外の建築教育の現場視察 (スタジオ参加と教育環境の見学)

【理由】

- 1) 主として北米及び北欧の各地でパナキュラーな建築形態の類例を選別し、その構成律や集合形式を分析する。既往の研究、すなわち建築形態と街路景観の意味論的な分析などを継承し、その視点をさらに展開させるために有効な資料の収集を主な目的とする。
- 2) 建築家という職能が国際的な交流の広がり高めめる一方で、日本の建築教育システムの特異性が今日相対的にかえりみられている。カリキュラムの編成や就学年数もその要因の一つである。主としてカナダ、米国、欧州で教育、とりわけスタジオへの参加を通して改めて、我が国との違いを現場で探る。(米国各地では **SPRING SEMESTER** に当たりスタジオへの参加が予定されるが、欧州では夏期休暇と重なるため、スタジオへの参加は一部に限定される。)

<国内研究員>

●長期

・小久保明浩 教授 教職課程研究室

平成 14 年 4 月 1 日～平成 15 年 3 月 31 日

東京都公文書館ほか

【研究課題】

塾の歴史の研究—近代日本教育の底流—

【理由】

1) 塾の歴史の研究の発表を行ってきた。「幕末における政治的反乱と私塾」(「維新変革における在村的諸潮流」[三一書房])、「私塾の展開」(「日本近代教育百年史 3」[国立教育研究所])、「中津における福沢諭吉の修学とその世界」(「福沢諭吉年間 9」[福沢諭吉協会])、「塾の構造—中津藩の塾を中心に」(「講座日本教育史 2」[第一法規]) など。以上は近世の塾についてである。明治以降を対象としたものには「文京区史」(文京区役所)、「東京百年史第 3 巻」(東京都)、「武蔵野美術大学紀要」などがある。以上の塾に関する諸論文は、地域的に限定されたものが多く、全国を視野に入れた、近世から近代への構想に欠けたきらいがある。

2) その後の私的努力の範囲で、塾関係の史料(未使用)が収集されている。秀島文書(佐賀県巖木町)、横井家文書(大分県中津市)など。また、未見の文書が各地に所蔵されていることが判明しているものもある(「東京都教育史資料総覧」など)。

そこで従来の研究と未使用の史料を使用して、近世から近代(戦前)までの塾の歴史を包括的にとらえることを目的とした研究を行いたい。表面に現象する教育制度の裏面に活動する塾教育の本質

にせまってみたいと思う。塾は任意の教育機関として機能してきた。そういう意味では影の教育機関であり、中々捉えにくい。その捉えにくい塾の歴史の全体を明らかにすることが、本研究の課題である。

○平成 15 年度
 < 在外研究員 >

●長期

・逢坂卓郎 教授 空間演出デザイン学科

平成 15 年 4 月 1 日～平成 16 年 3 月 31 日 滞在期間 365 日間

ドイツ (ベルリン他)	295 日
フランス (パリ)	30 日
イタリア (ミラノ)	10 日
フィンランド (ヘルシンキ)	20 日
オランダ (アムステルダム)	10 日

【研究課題】

- ①ドイツを中心とするユーロ各国の新しい芸術の試みを調査する。
- ②ユーロの研究、教育機関を訪問、滞在し研究と教育の目指す方向を探る。
- ③制作・展示を行い、理解と交流を図る。

【研究理由】

現在、私は宇宙開発事業団と「宇宙空間におけるアートの可能性」と言うテーマで共同研究を行っている。

ESA (欧州宇宙開発機構)、CNES (仏国立宇宙研究センター) から期待されており、今年の 3 月に日本のアーティストとしては二人目の無重力フライト実験を行った。KEO Project は 2003 年に初めて仏のアーティストが人工衛星を打ち上げるもので、パリ市と多くの企業の支援を受けている。

現在、新しい芸術の動きは、産みの苦しみを続けている EU の各地で見ることが出来る。特にドイツでは建築、音楽、ダンス、舞台美術の領域で、目を見張るものがある。日本が世界のアートシーンの中に入っていく可能性の一つに、伝統を背景にしたテーマとテクノロジーが融合された手法があげられる。ドイツ、オランダ、フランスは国の支援を受けてメディアアートの研究所を次々と立ち上げている。

これらの施設のリサーチを始め、Art in the Science, Science in the Art 等の展覧会に出品し、ユーロ各国が目指す 21 世紀の美術の実験現場に立ち会いたい。

・内田あぐり 教授 日本画学科

平成 15 年 9 月 1 日～平成 16 年 8 月 31 日 滞在日数 : 365 日

アメリカ (ニューヨーク)	330 日
メキシコ	14 日
アルゼンチン (ブエノスアイレス)	21 日

【研究課題】

アメリカ及び中南米に於ける造形表現の研究

研究活動と研究環境

【研究理由】

①アメリカに於ける現代の美術、絵画表現と日本の絵画との差異について

②ニューヨークを活動の拠点として、中南米（主にアルゼンチン・メキシコ）を訪れ、ラテンアメリカの風土に育まれた造形表現、現代の絵画を研究する。特にラテンアメリカの死生観、又、原初的な造形を持つ古代からの人体表現など、各地の関連施設、人類博物館、美術館などを訪れ取材する。

①と②の研修目的については、現在自分の制作テーマとしている「日本画素材による人体表現」に於て最も興味を持つ対象である。今後、自身の絵画表現を深化する為にもアメリカ及びラテンアメリカの未知なる造形を学びたいと考えている。現地での取材をすることで異文化の造形や日常に触れ、自身の視野を広め、仕事を充実していくことが必要であると考えている。研修の成果は教育現場、学生達に還元していくことができると考えている。

・下村千早 教授 視覚伝達デザイン学科

平成 15 年 9 月 1 日～平成 16 年 8 月 31 日 滞在日数：365 日

アメリカ（ボストン） 275 日

ヨーロッパ各地 90 日

【研究課題】

アメリカにおける情報デザインの研究と調査

【研究理由】

私は、1960 年代から情報美学、コンピュータとデザイン、情報とデザインの研究をおこなってきた。1975 年頃から武蔵野美大における最初のコンピュータによるデザインの授業（芸術情報処理研究）を始めた。その後、プログラミング、コンピュータ・アート、コンピュータ・グラフィック、マルチメディア、デザインとデータベース、そして、1990 年頃から情報デザイン領域を開拓し始めて、インタフェース、ネットワークとデザインなどの研究、発表、教育を先端的、開発的、発展的におこなってきた。

今回の在外研究の目的は、情報社会の全く新しい産業とデザインの領域として、1990 年前後から確立し始めた情報デザイン領域がアメリカにおいて具体的にどのような活動をおこない、どこまで広がっているのかを研究する。そして情報デザインの中核になりつつあるヒューマン・インタフェース、ネットワークに関するデザインを、現在の私の研究課題である情報アーキテクチャとインタラクティブ・プロセス（対話的認知過程）の面から研究をおこなう。そして、RISD の情報デザイン、Visible Language などの研究者と交流して、ネットワークとデザイン、インタフェースデザインの課題、方法論、技術、教育プログラムなどを研究、調査する予定である。そして、その交流と概知の方々を手掛かりにアメリカの情報とデザインに関わる研究所、大学、施設などの現状を視察する予定である。

滞在の資格については、アメリカ東部ロードアイランド州の Rhode Island School of Design (RISD)（ロードアイランド美術デザイン大学）の大学院に特別研究員として 1 年間在籍して、そこを拠点にして研究活動をおこなう予定である。1999 年及び 2002 年に訪問教授として招聘した RISD の Dr. Thomas Ockerse 教授（大学院院長）から研究員として受入と在籍の了承を得ているので、ボストン市内に在住し、その資格を活用して滞在目的に沿った研究活動をおこないたい。

尚、機会があればドイツの ZKM（アートとメディア技術センター）、オーストリアの AEC（アルス・エレクトロニカ・センタ

一)、フランスのポンピドーセンターのデジタルアーカイブなど情報とデザインに関する活動の現状を視察する予定である。

○平成 16 年度

<在外研究員>

●長期

・椎名純子 教授 空間演出デザイン学科

平成 16 年 4 月 1 日～平成 17 年 3 月 31 日 滞在日数：364 日

フランス、ベルギー、オランダ、スイス、ドイツ、フィンランド、スウェーデン、デンマーク、イタリア、スペイン、ポルトガル	183 日
中国（上海戯劇学院、黄土高原地域、福建地域、雲南地域）	122 日
タイ、インドネシア、インド	59 日

【研究課題】

- ①フランス国内及びその周辺国のエコ・ミュゼの比較研究。
- ②アジア（特に中国）各地域における日常と非日常空間の比較研究と居住形態調査。

【研究理由】

都市の構造、地域産業、文化の伝承、生活スタイル、自然保護など多面的な角度から検討し、街並み保存や再生、復活、活性化を目指すエコ・ミュゼの提唱者リヴェール氏の趣旨、目的、将来の目標など、フランスを中心とするヨーロッパ各地域の取り組みを通して、それぞれの地域における活動の成果が我々の日常生活にフィードバックできるシステムを検証する。

アジアの各地域の気候、風土に適応した日常生活空間と非日常的行事や習慣が展開される空間を比較研究し、現在の生活環境において、再検討されるべき問題点を分析する。

環境先進国であるドイツをはじめとするヨーロッパ諸国のエネルギーを生み出すテクノロジーの施設や装置を実地研修し、都市再開発の実状を把握すると同時に、実現可能なエネルギーシステムを探り、今後の健全な現実的ライフスタイルを検討する。

・川島重治 教授 基礎デザイン学科

平成 16 年 8 月 1 日～平成 17 年 7 月 31 日 滞在日数：364 日

イギリス（ロンドン）	182 日
アメリカ（ニューヨーク）	91 日
フランス（パリ）	91 日

【研究課題】

ヨーロッパ諸国・アメリカにおける歴史・風土と生活環境デザインとの関係性ならびにデジタル情報環境としての都市環境の在り方の動向調査

【研究理由】

1973 年以來、提唱してきた 視知覚的事象学（Visio-Perceptual Eventology）（研究紀要 No.1, No.2, No.3, No.4）に対して、一層の一般化を計るために、これまでの日本の生活環境に関する調査資料以外に、海外の資料が必要となりました。

今回の在外研究は、ロンドン・ニューヨーク・パリを滞在の拠点としながら、イギリスを初めとしてヨーロッパ諸国・アメリカにおける歴史・風土と生活環境のデザインとの関係性、さらにデジタ

研究活動と研究環境

ル情報文明と都市環境形成の在り方について、日常生活の視点から調査することです。

●短期

・伊藤高弘 教授 保健体育研究室

平成 16 年 9 月 1 日～平成 17 年 2 月 28 日 滞在日数：180 日

フランス（パリ） 180 日

【研究課題】

現代フランスのスポーツ法制とスポーツ運動に関する研究—特に 2000 年法制下での行財政と運動について

【研究理由】

1997 年のジョスパン内閣が成立後、世界初の週 35 時間労働制度が実現し、増大した余暇と連動してスポーツ・文化・芸術および教育の在り方が鋭く問われてきた。この新制度とその在り方について、同時並行的に FSGT 月刊機関誌『スポーツと野外』の関係論文や記事の訳出を行い、『スポーツのひろば』『海外短信』を通じて紹介を試みてきた。このうちスポーツについての根拠となっているのは、国民のスポーツ振興を謳った 1984 年法（アビス法）を基礎に、2000 年法（ジョルジュ・マリー・ビュッフエ法）である。特にこれら諸法のなかで注目されるのは、1984 年法で制定された CNAPS（全国身体活動・スポーツ評議会）が、その後 16 年間にわたって担当大臣が署名して発効する政令が忌避されてきたが、ジョルジュ・マリー・ビュッフエ大臣が署名し実働を開始したことであった。今回訪仏によって、実地踏査を試みたい。その後、内閣が後退し一転して前内閣の諸制度が後退・変質の危機にさらされている。この点の実状と研究・運動の動向についても把握したい。2004 年 12 月は、FSGT 創立 70 周年記念にあたるが、現地で記念式典への参加と記念事業に参加をする予定である。

・廖赤陽 教授 一般教育研究室

平成 16 年 9 月 1 日～平成 17 年 2 月 28 日 滞在日数：180 日

シンガポール 61 日

フィリピン 61 日

香港 30 日

中国（廈門） 28 日

【研究課題】

東・東南アジアにおける華人ネットワーク、社会文化とエスニシティに関する調査研究

【研究理由】

①いわゆる華人研究を通して、アジア地域における自律性とその連続性に関する歴史認識を深められるのみならず、グローバル・リージョン、ローカルなどの要素が重層的に絡み合う今日の社会経済と文化現象を理解するための重要な糸口も得られる。こうした研究を行うために、歴史学・人類学・社会学などの学際的手法を動員し、一定期間を通しての海外現地でのフィールドワークが必要である。さらに集中研究により、これまでの研究を体系的に成果化することが期待できる。②これまで、今現在を歴史的に理解することを中心に本学における歴史教学を行ってきた。海外現地でのフィールドワークを通して、東・東南アジア地域におけるエスニック社会、経済、文化、風習などに関する資料を広く収集し、これらの新鮮な素材を以て本学における歴史教育をより一層充実さ

せたいと考えている。

○平成 14 年度

<海外研修>

●専任教員

・面出 薫 教授 空間演出デザイン学科
ドイツ(フランクフルト)

平成 14 年 4 月 13 日～平成 14 年 4 月 19 日

Frankfurt MESSE 2002 において招待講演を行う為。

・戸田 裕介 助教授 共通彫塑研究室

韓国(釜山、保寧)

平成 14 年 4 月 16 日～平成 14 年 4 月 20 日

「釜山ビエンナーレ 2002」、「釜山彫刻プロジェクト」招待参加の事前打合せ。

・新見 隆 教授 芸術文化学科

デンマーク(コペンハーゲン)、オーストリア(ウィーン)

平成 14 年 4 月 26 日～平成 14 年 5 月 6 日

ジョージ・ジェンセン・デザイン賞授与委員会出席。ウィーン世紀末デザイン展打合せ。

・栗屋 容子 教授 一般教育研究室

イタリア(ローマ)

平成 14 年 6 月 22 日～平成 14 年 7 月 1 日

国際学会「19th International Conference on X-ray and Inner-shell Processes」に出席。(内殻電子過程のセッションにおいて座長を勤める)

・島崎 信 教授 工芸工業デザイン学科

ポーランド(ポズナム、ワルシャワ)

平成 14 年 5 月 6 日～平成 14 年 5 月 13 日

ポーランド産業省と JETRO による「ポーランド家具対日振興計画」の立案者として、関係者との協議。ポズナム国際家具展の視察とデザイン資料収集。

・小石 新八 教授 通信教育課程研究室

中国(北京)

平成 14 年 6 月 10 日～平成 14 年 6 月 17 日

中国戯曲学院特別講義、及び中国戯劇学院 50 周年記念事業出席。

・向井 周太郎 教授 基礎デザイン学科

ドイツ(ミュンスター)

平成 14 年 7 月 1 日～平成 14 年 8 月 31 日

ミュンスター大学コミュニケーション科学研究所での研究滞在。「デザイン思想とモルフォロジー研究について」の関連研究機関の調査。

・新見 隆 教授 芸術文化学科

韓国(ソウル)

平成 14 年 6 月 28 日～平成 14 年 6 月 30 日

研究活動と研究環境

エルメス社デザイン賞の審査。

・新島 実 教授 視覚伝達デザイン学科

韓国 (ソウル)

平成 14 年 7 月 7 日～平成 14 年 7 月 13 日

弘益大学主催「ワークショップー都市の知覚と記述された経験」に出席、及び「デザインにおける知覚とその記述」の講演のため。

・寺山 祐策 教授 視覚伝達デザイン学科

韓国 (ソウル)

平成 14 年 7 月 8 日～平成 14 年 7 月 14 日

韓国弘益大学において行われる日中韓三ヶ国のワークショップに招聘され、学生と共に参加する。また「アートセンター・ナビ」において講義を行う。

・白石 美雪 教授 一般教育研究室

オーストリア (ザルツブルグ)

平成 14 年 8 月 7 日～平成 14 年 8 月 21 日

ザルツブルグ音楽祭の取材。

・佐藤 淳一 助教授 デザイン情報学科

ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマーク

平成 14 年 8 月 20 日～平成 14 年 9 月 6 日

北欧地域におけるネットワーク系メディアの利用に関して、現状の把握とデータの収集。

・寺山 祐策 教授 視覚伝達デザイン学科

ロシア (モスクワ、サンクトペテルブルグ)

平成 14 年 8 月 25 日～平成 14 年 9 月 2 日

エル・リシツキーに関する資料収集と現地調査の為。

・玉蟲 敏子 教授 美学美術史研究室

フランス (パリ)

平成 14 年 8 月 25 日～平成 14 年 9 月 2 日

フランス国立図書館東洋写本室・版画室において江戸時代の版本等の調査・研究。

・粟屋 容子 教授 一般教育研究室

フランス (カン)

平成 14 年 8 月 28 日～平成 14 年 9 月 8 日

フランス Caen 大学で開催される「第 11 回高電離イオン物理学国際会議」に出席のため。

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

韓国 (ソウル)

平成 14 年 7 月 5 日～平成 14 年 7 月 7 日

学会参加および受賞

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

カンボジア (シェムリアップ)

平成 14 年 7 月 26 日～平成 14 年 8 月 27 日

カンボジアのシェムリアップにあるバイヨン寺院の実地調査

・ 廖 赤陽 教授 一般教育研究室

中国

平成 14 年 8 月 1 日～平成 14 年 9 月 5 日

学会出張と現地考察

・ 椎名 純子 教授 空間演出デザイン学科

フランス (パリ)

平成 14 年 8 月 14 日～

フランス西南部エコ・ミゼ視察。プロジェクト打合せ。

・ 藤枝 晃雄 教授 美学美術史研究室

アメリカ (フィラデルフィア 他)

平成 14 年 8 月 27 日～平成 14 年 9 月 6 日

①ザ・ホップ・ロック・グラスナー・ハウス・アント・スタディ・センターにおけるラウンド・テーブル・ディスカッション

②ペンシルベニア大学付属考古学博物館におけるシュメール文化の資料調査

・ 戸田 裕介 助教授 共通彫塑研究室

韓国 (釜山)

平成 14 年 9 月 13 日～平成 14 年 9 月 16 日

釜山ビエンナーレ／彫刻プロジェクト出品作品セッティング調整、及び展覧会オープニング出席のため。

・ 今井 良朗 教授 芸術文化学科

アメリカ (ニューヨーク 他)

平成 14 年 9 月 29 日～平成 14 年 10 月 5 日

フレザー氏所蔵コレクション購入に関する助言、およびクーパー・ヒューイット・ミュージアム、写真センター、MOMA などにおける美術館教育、地域活動の調査。

・ 小竹 信節 教授 空間演出デザイン学科

ルーマニア、フランス、イギリス

平成 14 年 10 月 5 日～平成 14 年 11 月 6 日

イネスコ作、イオン・カラシトル演出「マクベット」ヨーロッパ公演の舞台美術担当者として。

・ 今井 良朗 教授 芸術文化学科

ドイツ、オーストリア、イタリア

平成 14 年 10 月 19 日～平成 14 年 10 月 30 日

ドイツ Fachhochschule Münster University of Applied Science での特別講義、および学生作品交換展など交流のための意見交換。

・ 戸田 裕介 助教授 共通彫塑研究室

韓国

平成 14 年 7 月 27 日～平成 14 年 8 月 27 日

釜山ビエンナーレ「釜山彫刻プロジェクト」招待参加、現地制作のため。

・ 新見 隆 教授 芸術文化学科

シンガポール、ベトナム、(ホーチミン・ハイ)

平成 14 年 9 月 13 日～平成 14 年 9 月 18 日

国際交流基金主催「日本のデザイン展」開催館の視察のため。

研究活動と研究環境

・岡部 あおみ 教授 芸術文化学科

アメリカ (ニューヨーク)

平成 14 年 9 月 29 日～平成 14 年 10 月 4 日

カーパ・ヘーイット・ミュージアム、写真センター、MOMA などにおける美術館教育、地域活動の調査 (共同研究)

・千々岩 英彰 教授 一般教育研究室

中国 (上海)

平成 14 年 10 月 20 日～平成 14 年 10 月 24 日

共同研究の調査と打合せのため

・山本 唯博 教授 保健体育研究室

韓国 (ソウル)

平成 14 年 10 月 28 日～平成 14 年 11 月 2 日

韓国 梨花女子大学校体育科学大学での特別講義

・森 豪男 教授 空間演出デザイン学科

アメリカ (ニューヨーク)

平成 14 年 10 月 30 日～平成 14 年 11 月 7 日

ニューヨークの空間演出、フィールドワーク

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

韓国 (ソウル 他)

平成 14 年 10 月 30 日～平成 14 年 11 月 6 日

韓国の仏教寺院址の調査

・田中 秀穂 教授 工芸工業デザイン学科

韓国 (ソウル)

平成 14 年 11 月 5 日～平成 14 年 11 月 8 日

富山県平村の産業である、和紙の紹介、およびくちぎり絵>作品の展示を含めた平村文化の紹介、ワークショップ、韓国側の作家達 (大学関係者) との交流の指導と弘益大学主催ファイバーアートの審査のため。

・今泉 洋 教授 デザイン情報学科

オランダ (アムステルダム)

平成 14 年 11 月 13 日～平成 14 年 11 月 19 日

第 7 回 Doors of Perception 国際会議、及び、インタラクティブデザイン教育者会合出席のため

・長澤 忠徳 教授 デザイン情報学科

オランダ (アムステルダム)

平成 14 年 11 月 13 日～平成 14 年 11 月 19 日

第 7 回 Doors of Perception 国際会議、及び、インタラクティブデザイン教育者会合出席のため

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

カンボジア (シェムリアップ)

平成 14 年 12 月 16 日～平成 15 年 1 月 12 日

ユネスコ活動 (日本国政府アンコール遺跡救済チームの美術史班班長としての活動)

・三浦 耐子 教授 日本画学科

イタリア（ローマ）

平成 14 年 11 月 4 日～平成 14 年 11 月 10 日

彩色文化財の材料と技法に関する研究。

・小石 新八 教授 通信教育課程研究室

中国（上海 他）

平成 14 年 12 月 23 日～平成 15 年 1 月 5 日

上海戯劇学院の范教授他と共同研究として雲南省西部地区の民俗衣装、居住形態、民俗芸能と風土性を中心とした調査活動を行う。

・田中 栄作 教授 空間演出デザイン学科

フランス、ドイツ

平成 14 年 10 月 24 日～平成 14 年 11 月 3 日

資料収集と研究、空間造型・企画打合せ

・源 愛日児 教授 建築学科

アメリカ

平成 14 年 11 月 11 日～平成 14 年 11 月 17 日

講義と講評

・廖 赤陽 教授 一般教育研究室

アメリカ

平成 14 年 11 月 27 日～平成 14 年 12 月 1 日

研究発表

・佐々木成明 助教授 視覚伝達デザイン学科

韓国（ソウル）

平成 14 年 12 月 3 日～平成 14 年 12 月 5 日

学会シンポジウム出席

・椎名 純子 教授 空間演出デザイン学科

中国（上海 他）

平成 14 年 12 月 23 日～平成 15 年 1 月 5 日

上海戯劇学院の范教授他と共同研究として雲南省西部地区の民俗衣装、居住形態、民俗芸能と風土性を中心とした調査活動を行う。

・内田 あぐり 教授 日本画学科

アメリカ（ニューヨーク）

平成 15 年 1 月 4 日～平成 15 年 1 月 15 日

JAL 企画展覧会出品の為

・今井 良朗 教授 芸術文化学科

中国（上海）

平成 14 年 12 月 15 日～平成 14 年 12 月 18 日

上海ビエンナーレ、上海博物館、上海の美術・デザイン等の調査等

・楫 義明 教授 芸術文化学科

研究活動と研究環境

中国（上海）

平成 14 年 12 月 15 日～平成 14 年 12 月 18 日

上海ビエンナーレ、上海博物館、上海の美術・デザイン等の調査等

・新見 隆 教授 芸術文化学科

中国（上海）

平成 14 年 12 月 15 日～平成 14 年 12 月 18 日

上海ビエンナーレ、上海博物館、上海の美術・デザイン等の調査等

・関野 吉晴 教授 一般教育研究室

ペルー

平成 14 年 12 月 18 日～平成 15 年 1 月 4 日

ペルー・アマゾン マチゲンガ族の 30 年間の文化変容のフィールドワーク

・島崎 信 教授 工芸工業デザイン学科

オーストリア

平成 15 年 2 月 15 日～平成 15 年 2 月 20 日

平成 15 年 3 月 17 日より 3 月 27 日迄、田中記念室にて開催予定の「アドルフ・ロスと F.O.シュミット工房展-和と匠のコラボレーション-」の準備作業、展示資料借用品選定および打合せのため

・小島 常成 教授 コンピュータ演習研究室

アメリカ

平成 15 年 2 月 26 日～平成 15 年 3 月 6 日

東京藝術大学芸術情報センターとの共同研究における MIT との事前折衝、ワシントン国立国会図書館のシステム研修・視察

・玉蟲 敏子 教授 美学美術史研究室

イギリス

平成 15 年 2 月 27 日～平成 15 年 3 月 6 日

大英博物館において 3 月 1 日に開催される KAZARI 展シンポジウムに出席するため

ライデン国立民族学博物館にて江戸時代の版本の調査・研究

・白石 美雪 教授 一般教育研究室

フランス

平成 15 年 2 月 28 日～平成 15 年 3 月 4 日

新作オペラの取材

・田中 秀穂 教授 工芸工業デザイン学科

韓国

平成 15 年 3 月 10 日～平成 15 年 3 月 13 日

日韓繊維美術展覧会<ポチャジとふろしき>展 展示&交流のため

・安部 泰人 教授 保健体育研究室

オーストラリア

平成 15 年 3 月 27 日～平成 15 年 3 月 31 日

第 6 回ワールドカップ大会直前情報収集のため。Merryland の 35 周年記念式典に参加するため。

・廖 赤陽 教授 一般教育研究室

香港

平成 15 年 3 月 12 日～平成 15 年 3 月 17 日

研究調査、学会発表

・新見 隆 教授 芸術文化学科

シンガポール、フィリピン

平成 15 年 3 月 10 日～平成 15 年 3 月 14 日

国際交流基金主催「日本デザイン展」現地打合せ

・田中 栄作 教授 空間演出デザイン学科

フランス

平成 15 年 3 月 25 日～平成 15 年 4 月 4 日

研究資料取材の為

○平成 15 年度

<海外研修>

●専任教員

・池田 良二 教授 油絵学科

韓国（釜山）

平成 15 年 4 月 15 日～平成 15 年 4 月 17 日

韓国現代美術の動向の調査、共同研究調査

・藤枝 晃雄 教授 美学美術史研究室

アメリカ

平成 15 年 7 月 15 日～平成 15 年 9 月 6 日

ヤドロー(Yaddo)からの招待による美術研究及び交流

・小池 一子 教授 空間演出デザイン学科

フィンランド、スウェーデン

平成 15 年 4 月 25 日～平成 15 年 5 月 4 日

ストックホルムの美術館 Liljevalchs で開催される The Optimists 展でのアーティストとのトークに招待されたため。アーティスト、ヨルク・ガイスマールの佐賀町エキシビットスペースでの作品を展示する。

・新見 隆 教授 芸術文化学科

アメリカ(ワシントン、ニューヨーク)

平成 15 年 5 月 1 日～平成 15 年 5 月 7 日

ワシントン・サックラー・ギャラリーでの「イサム・ノグチと日本前衛陶芸」展オープニング出席、同展打合せ、他。

・岡部 あおみ 教授 芸術文化学科

イタリア

平成 15 年 6 月 10 日～平成 15 年 6 月 17 日

国際交流基金から国際展評価委員としてヴェネツィア・ビエンナーレに派遣

・粟屋 容子 教授 一般教育研究室

ロシア、スウェーデン

平成 15 年 7 月 15 日～平成 15 年 7 月 31 日

研究活動と研究環境

XXIII International Conference on Photonic, Electronic, and Atomic Collisions 及び International Symposium "Atomic Cluster Collisions: fission, fusion, electron, ion, and photon impact" に出席、討議を行う。

・小竹 信節 教授 空間演出デザイン学科

デンマーク、ドイツ

平成 15 年 5 月 21 日～平成 15 年 5 月 28 日

舞台美術打合せのため

・小石 新八 教授 通信教育課程研究室

チェコ(プラハ)

平成 15 年 6 月 9 日～平成 15 年 6 月 15 日

プラハ・カトリエンナーレ 2003 における学生部門の会場設営、開幕式への出席、国際的な舞台美術界の現状把握

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

韓国(ソウル)

平成 15 年 6 月 10 日～平成 15 年 6 月 16 日

展覧会の見学および特別調査

・小松 誠 教授 工芸工業デザイン学科

ノルウェー(オスロ)

平成 15 年 6 月 20 日～平成 15 年 6 月 26 日

オスロ国際陶芸シンポジウム(OICS2003)に参加するため

・椎名 純子 教授 空間演出デザイン学科

チェコ

平成 15 年 6 月 9 日～平成 15 年 6 月 15 日

プラハ・カトリエンナーレ 2003 における、学生部門の学生作品展示、参加指導

・山本 唯博 教授 保健体育研究室

韓国

平成 15 年 8 月 3 日～平成 15 年 8 月 7 日

14th International Symposium for Adapted Physical Activity における研究発表

・柳澤 紀子 教授 油絵学科

イタリア、ドイツ

平成 15 年 8 月 5 日～平成 15 年 8 月 12 日

ベニスビエンナーレ見学、ドイツの現代建築、現代美術の視察

・立花 直美 教授 建築学科

ルーマニア

平成 15 年 8 月 20 日～平成 15 年 9 月 3 日

東西文明交流地の特徴ある3つの地域の木造建築の教会と集落の見学・調査

・滝沢 具幸 教授 日本画学科

ベルギー

平成 15 年 9 月 5 日～平成 15 年 9 月 14 日

ベルギー各所美術館見学及び絵画、作品研究、各都市・風景取材

・新見 隆 教授 芸術文化学科

シンガポール

平成 15 年 8 月 22 日～平成 15 年8月 27 日

国際交流基金の委嘱による「現代美術・デザイン展」の、シンガポール美術館での開催のため

・那須 勝哉 教授 日本画学科

フィンランド

平成 15 年 8 月 24 日～平成 15 年8月31日

北方の風土における位置の検証と併せて創作への取材を目的とする。

・椎名 純子 教授 空間演出デザイン学科

フランス、オーストリア

平成 15 年 8 月 22 日～平成 15 年9月 6日

ヨーロッパ・エコ・ミュゼ、エコハウス視察

・寺原 芳彦 教授 工芸工業デザイン学科

アメリカ

平成 15 年 9 月 2 日～平成 15 年9月6日

米国ロスアンジェルス及び近郊に存在するケーススタディハウス(CSH)、特にチャールズ・イームズの作品を中心に建築、インテリア、家具の現地視察

・遠藤 竜太 教授 油絵学科

ポーランド

平成 15 年 9 月 15 日～平成 15 年9月 23 日

クラクフ国際版画トリエンナーレのプログラムの一つである展覧会(Poland-Japan)のレセプション出席及びクラクフ美術アカデミーを訪問する。

・小竹 信節 教授 空間演出デザイン学科

ロシア

平成 15 年 9 月 18 日～平成 15 年9月 26 日

サンクト・ペテルブルグ建都300周年記念行事での舞台「冬物語」・ウィリアム・ガリンスキー演出の舞台装置・衣装デザイナー担当

・池田 良二 教授 油絵学科

タイ

平成 15 年 10 月 1 日～平成 15 年 10 月5日

タイ シラバゴン大学創立60周年記念 2003 インターナショナル・プリント・アンド・ドローイング式典参加(シラバゴン大学アート・アンド・カルチャーセンター)

・小竹 信節 教授 空間演出デザイン学科

フランス

平成 15 年 10 月 7日～平成 15 年 10 月 16 日

舞台「冬物語」(W. シェイクスピア作)のパリ巡回公演の舞台装置・衣装デザイナー担当

・新見 隆 教授 芸術文化学科

マニラ(フィリピン)

研究活動と研究環境

平成 15 年 11 月 25 日～平成 15 年 11 月 28 日

国際交流基金主催「現代日本デザイン展」開催のため

・立花 直美 教授 建築学科

イタリア

平成 15 年 12 月 27 日～平成 16 年 1 月 14 日

中世都市の環境形成に関する研究のための予備調査

・寺山 祐策 教授 視覚伝達デザイン学科

韓国

平成 16 年 1 月 8 日～平成 16 年 1 月 10 日

韓国現代美術館における「Art Book Art」展において講義

・中原俊三郎 教授 工芸工業デザイン学科

ドイツ

平成 16 年 3 月 21 日～平成 16 年 3 月 27 日

CeBIT2004(国際情報通信技術見本市)の視察

・森江 健二 教授 工芸工業デザイン学科

ドイツ

平成 16 年 1 月 31 日～平成 16 年 2 月 9 日

・AUTO MOTOR und SPORT 誌主催の国際自動車デザインコンペ出展、同カーデザインフォーラム参加

・PFORZHEIM 大学主催の自動車デザイン発表展示会／フォーラム参加

・新見 隆 教授 芸術文化学科

フランス(パリ)

平成 16 年 2 月 8 日～平成 16 年 2 月 14 日

箱根ラリック美術館開館準備のための打合せ、調査

・新見 隆 教授 芸術文化学科

アメリカ(ニューヨーク)

平成 16 年 2 月 28 日～平成 16 年 3 月 5 日

イサム・ノグチ展開催のための打合せ、芸術文化学科学生とのミュージオロジー研究・調査

・関野 吉晴 教授 一般教育研究室

北西ネパール、チベット国境

平成 16 年 3 月 4 日～平成 16 年 3 月 30 日

北西ネパール、チベット仏教圏での医療人類学的調査、診療所建設と医療ボランティア活動及びチベット仏教圏での被差別民のカースト社会と日本の被差別民との比較

・長尾 重武 教授 建築学科

スペイン

平成 16 年 3 月 6 日～平成 16 年 3 月 15 日

サラマンカ大学にて、「日本の建築」について集中講義を行う。

・田辺 久美子教授 空間演出デザイン学科

アメリカ

平成 16 年 3 月 8 日～平成 16 年 3 月 17 日

2004年10月26日から日本橋で開催予定の、アメリカの仲間たち展打ち合わせ及び PENSACOLA MUSEUM(フロリダ)で開催中の展覧会 ”THE CUTTING EDGE”会場で個展中の Susan SILLS の gallery talk の進行を務める。

・ 齊藤 國靖 教授 油絵学科

イギリス、フランス

平成 16 年 3 月 9 日～平成 16 年3月17日

16, 17世紀を中心としたヨーロッパ油彩絵画のメデューム研究及び資料収集。

・ 三浦 均 助教授 映像学科

アメリカ

平成 16 年 3 月 12 日～平成 16 年3月 18 日

カリフォルニア大学サンタバーバラ校における、惑星科学研究会に出席。

・ 藤枝 晃雄 教授 美学美術史研究室

アメリカ

平成 16 年 3 月 22 日～平成 16 年3月31日

美術史の現状に関する調査

○平成 16 年度

<海外研修>

●専任教員

・ 佐久間保明 教授 一般教育研究室

ドイツ、スイス

平成 16 年 4 月 1 日～平成 16 年4月8日

ヨーロッパにおける絵本の調査と資料収集

・ 伊藤 高弘 教授 保健体育研究室

フランス

平成 16 年 5 月 18 日～平成 16 年5月 25 日

FSG主催・第4回全国スポーツ会議(ANS)への参加、及び資料蒐集と研究情報交換。

・ 横溝 健志 教授 通信教育課程研究室

チュニジア、イタリア

平成 16 年 3 月 29 日～平成 16 年4月 11 日

海外都市景観の取材

・ 田中 秀穂 教授 工芸工業デザイン学科

韓国

平成 16 年 5 月 3 日～平成 16 年5月8日

百想記念館における宋繁樹氏との二人展の準備、及びオープニング出席のため

・ 及部 克人 教授 視覚伝達デザイン学科

韓国

平成 16 年 4 月 29 日～平成 16 年5月2日

研究活動と研究環境

弘益大学主催の「メタ・デザイン・インターナショナル・フォーラムに於いて、本学視覚伝達デザイン学科の教育について講演を行う。

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

韓国

平成 16 年 4 月 28 日～平成 16 年 5 月 7 日

韓国・江原道洪川物傑里および慶尚北道慶尚南山の廃寺址の発掘指導

・今井 良朗 教授 芸術文化学科

韓国

平成 16 年 5 月 28 日～平成 16 年 5 月 31 日

韓国釜山ウルサン大学で開催される基礎造形学会に出席するため

・戸田 裕介 助教授 共通彫塑研究室

アメリカ

平成 16 年 8 月 8 日～平成 16 年 9 月 12 日

Djerrassi RESIDENT ARTISTS PROGRAM参加

(現地滞在／彫刻作品制作のため)

・栗屋 容子 教授 一般教育研究室

リトアニア

平成 16 年 9 月 4 日～平成 16 年 9 月 13 日

国際学会「12th International Conference on the Physics of Highly Charged Ions」に出席のため

・白石 美雪 教授 一般教育研究室

フランス、ドイツ

平成 16 年 7 月 13 日～平成 16 年 7 月 25 日

新作オペラおよび新演出オペラの取材

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

ベトナム

平成 16 年 8 月 5 日～平成 16 年 8 月 20 日

ベトナムのチャンパ彫刻の調査、および文化財保護財団研究助成による実地調査(2004 年 12 月～2005 年 1 月)の下見と打ち合わせ

・立花 直美 教授 建築学科

スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド

平成 16 年 7 月 16 日～平成 16 年 8 月 11 日

北欧諸都市の見学

・関野 吉晴 教授 一般教育研究室

モンゴル、ロシア

平成 16 年 7 月 8 日～平成 16 年 9 月 5 日

原日本人のやって来た主要 3 ルートのうちの北方ルート(シベリア～サハリン～北海道)を辿り、多様な日本人の身体的、文化的特徴を探る。

・北澤 洋子 教授 美学美術史研究室

ベルギー、イタリア

平成 16 年 8 月 13 日～平成 16 年 8 月 30 日

初期ネーデルラント絵画及び同時代のイタリア絵画の作品調査・資料収集のため

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

韓国

平成 16 年 8 月 25 日～平成 16 年 9 月 21 日

平成 16 年度科学研究費補助金による海外学術研究・調査(3年間)の初年度調査において研究代表者として参加。

・寺原 芳彦 教授 工芸工業デザイン学科

ノルウェー

平成 16 年 8 月 24 日～平成 16 年 9 月 1 日

ノルウェーのデザイナー、ピーター・オプスヴィック及びストック社製品のデザインについて現地調査

・森 豪男 教授 空間演出デザイン学科

イタリア

平成 16 年 8 月 26 日～平成 16 年 9 月 10 日

イタリア各都市の美術研究

・クリストフ・シャルル 助教授 映像学科

フランス

平成 16 年 7 月 28 日～平成 16 年 8 月 13 日

オリビエ・メシアン「Messiaen au pays de la Meije」フェスティバルの見学、イエゴル・レズニコフ氏のコンサート見学とインタビュー、パリで行われる展覧会やプロジェクトの打ち合わせや作業。

・小竹 信節 教授 空間演出デザイン学科

フランス、イタリア

平成 16 年 10 月 18 日～平成 16 年 11 月 16 日

イアン・カラミトル演出「オセロー」のフランス及びイタリア公演における美術監督として同行する。

・小石 新八 教授 通信教育課程研究室

北京、大連

平成 16 年 10 月 25 日～平成 16 年 11 月 7 日

中国戯曲学院の招聘による特別講義。山東省・大連市の史跡視察

・寺原 芳彦 教授 工芸工業デザイン学科

ケルン

平成 16 年 10 月 19 日～平成 16 年 10 月 23 日

ドイツ、ケルンにおけるオフィスファニチャーイベント、オルガテックへ招聘による視察。

・関野 吉晴 教授 一般教育研究室

ロシア

平成 16 年 10 月 22 日～平成 16 年 11 月 14 日

ロシア・サハ共和国に於いて、トナカイ遊牧をしている狩猟民の狩猟を調査することにより、他の型の狩猟民と比較研究する。

・三浦 均 助教授 映像学科

ニューヨーク

研究活動と研究環境

平成 16 年 11 月 10 日～平成 16 年 11 月 14 日

アメリカ自然史博物館 (AMNH, ニューヨーク市) にて「4次元デジタル宇宙プロジェクト」の成果報告およびプラネタリウム展示についての会議

・朴 亨國 助教授 美学美術史研究室

ベトナム

平成 16 年 12 月 22 日～平成 17 年 1 月 11 日

財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の研究助成による「バイヨンの修復における美術史的調査」(3年間の初年度)の研究代表者としてベトナム地域に残るクメール遺跡・遺品の調査を行う。

・井上 尚司 助教授 デザイン情報学科

アメリカ

平成 17 年 1 月 5 日～平成 17 年 1 月 14 日

Consumer Electronics Show (www.cesweb.org) 視察と、コンピュータ/ネットワーク市場調査のため

・関野 吉晴 教授 一般教育研究室

ロシア

平成 17 年 1 月 10 日～平成 17 年 2 月 15 日

数多くある日本人のやって来たルートのうち、北方ルートを通り(シベリア～サハリン～北海道)、先住民の狩猟、漁労文化を調査するとともに、ミトコンドリア DNA の採取を行い、彼らの系統、日本人との関係を探る。

・粟屋 容子 教授 一般教育研究室

中国

平成 17 年 3 月 9 日～平成 17 年 3 月 20 日

①国際ワークショップ「Physics at EBIT and Advanced Research at Light Sources - PEARL 2005」に出席し、1セッションの座長をつとめる。

②上海の Fudan University (旦大学) を訪問。完成間近い装置 EBIT に関する討論と助言を行う。

・伊藤 真一 専任講師 工芸工業デザイン学科

ガーナ共和国

平成 17 年 2 月 26 日～平成 17 年 3 月 17 日

ココナツ材を利用した家具の研究・制作

・新見 隆 教授 芸術文化学科

ニューヨーク、ワシントン

平成 17 年 2 月 25 日～平成 17 年 3 月 4 日

「イサム・ノグチと1950年代の前衛展」開催のための打合わせ、調査。芸術文化学科学生との課外美術館研究旅行。

・戸田 裕介 助教授 共通彫塑研究室

フランス、ドイツ

平成 17 年 2 月 26 日～平成 17 年 3 月 5 日

フランス、ヴァロリス市での展覧会打ち合わせのため

・三浦 均 助教授 映像学科

オーストラリア

平成 17 年 3 月 1 日～平成 17 年 3 月 4 日

Swinburne 大学 (メルボルン、オーストラリア)の Center for astrophysics and super computing (宇宙物理およびスーパーコンピューティングセンター)訪問。

現地研究員と技術・情報交換。共同研究 4 次元デジタル宇宙シアターの報告。

・田辺久美子 教授 空間演出デザイン学科

ニューヨーク、ワシントン

平成 17 年 3 月 10 日～平成 17 年 3 月 16 日

・本年 10 月 25 日(火)～11 月 12 日(土)に開催予定の VIRDIAN GALLERY (NEW YORK) での 10 回目個展及び同画廊でのパフォーマーとのコラボレーションについての打ち合わせ。

・昨年開催のアメリカの仲間たち展(オンワードギャラリー日本橋)の報告を含め VIRDIAN GALLERY の ARTISITS とチェルシーにある画廊主との討論会。

・小石 新八 教授 通信教育課程研究室

上海、桂林

平成 17 年 3 月 19 日～平成 17 年 3 月 25 日

日中共同研究の一環として調査旅行の作品展示開催のため、併せて、継続中の中国の都市、民居、劇場空間の調査

・玉蟲 敏子 教授 美学美術史研究室

シカゴ、ニューヨーク

平成 17 年 3 月 29 日～平成 17 年 4 月 6 日

・デ・ポール大学・シカゴ美術館・シカゴ大学共催シンポジウム ”Acquisition:Art and Ownership in Edo-Period Japan” に出席、発表のため

・シカゴ美術館、ニューヨークの古美術商の日本美術調査

・長谷川 堯 教授 美学美術史研究室

ロンドン、ストックホルム、パリ

平成 17 年 3 月 14 日～平成 17 年 3 月 29 日

両次大戦間における近代建築についてのヨーロッパ各国における調査

・板屋 緑 教授 映像学科

イタリア、ローマ

平成 17 年 3 月 20 日～平成 17 年 4 月 3 日

ローマ近郊の山岳都市(カルカータ、スポレート、カプローラ、テルニ、オルビエート、ヴィテルボ)の調査及び撮影

・陣内 利博 教授 視覚伝達デザイン学科

ニューヨーク

平成 17 年 3 月 23 日～平成 17 年 3 月 30 日

アメリカ美術館・博物館における展示方法の調査研究。主にニューヨークの施設。国際交流基金ニューヨーク支部との打ち合わせ等。

○平成 14 年度

<海外研修>

●助手

研究活動と研究環境

・丹羽 陽太郎 助手 共通彫塑研究室

ドイツ、オーストリア、スロバキア、イタリア

平成 14 年 8 月 5 日～平成 14 年 9 月 2 日

ドイツ、イタリアにおける美術鑄物の事情を視察。その他、中欧諸国の各時代の美術を概観する。

・吉岡 滋人 助手 共通デザイン研究室

ドイツ、チェコ、ハンガリー、ポーランド

平成 15 年 3 月 21 日～平成 15 年 4 月 25 日

近年、中欧・東欧に関わりのある作家や作品に関心を持つことが多く、その背景にある歴史や文化に触れる機会を持つ事を目的として、またドイツには現代美術の作品見学を目的として研修を計画。

・山田 佳一朗 助手 工芸工業デザイン学科

ドイツ、イタリア、フランス、イギリス

平成 15 年 3 月 30 日～平成 15 年 4 月 28 日

ヨーロッパの優れた建築、インテリア、家具を見学し、今後のデザイン活動に役立てることを目的とする。

・福田 寿寛 助手 空間演出デザイン学科

スペイン

平成 15 年 3 月 6 日～平成 15 年 3 月 13 日

劇場と建築様式の調査と視察。

・水落 史子 助手 工芸工業デザイン学科

スウェーデン、デンマーク

平成 15 年 3 月 7 日～平成 15 年 3 月 19 日

北欧のデザインを見聞すると共に日本との交通システムの違いについて知る。

・春日井 由美 助手 工芸工業デザイン学科

ドイツ、フランス

平成 15 年 3 月 24 日～平成 15 年 4 月 6 日

ヨーロッパにおける染織及び美術品の調査・研究。

・酒井 祐二 助手 日本画学科

アメリカ

平成 15 年 3 月 25 日～平成 15 年 4 月 23 日

chelsea,williamsburg,soho,ホリタティブスペース等ニューヨークを中心にアメリカのアートシーンの調査研究。

・森 須磨子 助手 芸術文化学科

ブータン

平成 15 年 3 月 31 日～平成 15 年 4 月 18 日

ブータンの文化保護政策を視察・体感し、文化の有り様について日本と比較する。

・瀧本 佳子 助手 芸術文化学科

スウェーデン、フィンランド、デンマーク、ドイツ

平成 15 年 3 月 29 日～平成 15 年 5 月 5 日

北欧における生涯学習の現状についての調査。ドイツの現代美術、デザイン視察。

・中村 恵夏 助手 基礎デザイン学科

ドイツ、スペイン、イタリア、ギリシア、トルコ

平成 15 年 3 月 28 日～平成 15 年 5 月 13 日

その地域における生活文化の違いの研究。主に、住空間、食文化を軸に調査する。

・八重樫 文 助手 デザイン情報学科

香港、台湾、韓国

平成 15 年 3 月 28 日～平成 15 年 4 月 3 日

アジア主要都市部の公共的なメディア（特にその画像表現に注目して）の調査と、韓国のデジタル教育現場の視察

○平成 15 年度

<海外研修>

●助手

・沖 知江子 助手 工芸工業デザイン学科

フィンランド、スウェーデン、デンマーク

平成 15 年 7 月 30 日～平成 15 年 8 月 20 日

北欧の風土とデザインの関連性を、主にガラス作品について個人作家やプロダクト製品の制作現場を訪れ調査する。

・畑野 奈々 助手 空間演出デザイン学科

フランス

平成 15 年 8 月 4 日～平成 15 年 9 月 5 日

パリを中心にした市場調査、ブティックの店舗設計、空間の使い方や見せ方などの調査及びファッションの歴史等の研究

・肴倉 睦子 助手 基礎デザイン学科

フランス、ドイツ、スイス

平成 15 年 7 月 28 日～平成 15 年 8 月 27 日

近代デザイン史への造詣を深めるための、歴史的資料、建築の視察

・横田 久美子 助手 デザイン情報学科

ギリシア共和国

平成 15 年 7 月 29 日～平成 15 年 8 月 23 日

西洋文化の根源をギリシャ各地の遺跡を通して探求する。

・野口 文健 助手 共通絵画研究室

イタリア、スペイン、デンマーク

平成 16 年 1 月 5 日～平成 16 年 2 月 5 日

ヨーロッパ各地の美術館を巡り、その風土に育まれた精神と、その精神の結実ともいべき芸術作品を視察することで、今後の作家活動に役立てる。

・飯島 浩二 助手 共通彫塑研究室

タイ(バンコク)

平成 16 年 1 月 15 日～平成 16 年 2 月 14 日

研究活動と研究環境

タイにおける現代美術の動向の視察及び文化研修。

・嶋田 喜昭 助手 彫刻学科

タンザニア、ケニア、エチオピア

平成 16 年 3 月 30 日～平成 16 年 4 月 28 日

アフリカの彫刻及びモチーフとして捉えられる動物の考察。

・吉野 郁夫 助手 工芸工業デザイン学科

アメリカ合衆国

平成 16 年 3 月 30 日～平成 16 年 4 月 30 日

アメリカ北部における木工芸の調査と視察。スタジオファニチャーの動向を知る。

・宮下 晃久 助手 映像学科

ドイツ、オランダ

平成 16 年 3 月 31 日～平成 16 年 4 月 25 日

ヨーロッパにおける現代写真の動向を探る。また、各地での撮影を行う。

・境澤 邦泰 助手 油絵学科

ギリシャ、イタリア

平成 16 年 3 月 30 日～平成 16 年 5 月 1 日

美術作品研究

・上村 晴彦 助手 空間演出デザイン学科

イギリス、オランダ、タイ、アメリカ、キューバ、中国、チュニジア、ベトナム

平成 16 年 3 月 31 日～平成 16 年 5 月 10 日

都市に生きる衣服(情報)収集

○平成 16 年度

< 海外研修 >

●助手

・永井 佳奈子 助手 工芸工業デザイン学科

チェコ共和国、デンマーク

平成 16 年 7 月 17 日～平成 16 年 8 月 12 日

東欧・北欧の工芸・デザイン・美術の視察・研究

・鳥井 真由子 助手 デザイン情報学科

ドイツ、チェコ共和国

平成 16 年 7 月 29 日～平成 16 年 8 月 28 日

ドイツの現代建築、デザインの視察及びチェコのアニメーションの動向を探る。

・落合 佐和子 助手 芸術文化学科

デンマーク、ドイツ、

チェコ、オーストリア

平成 17 年 3 月 28 日～平成 17 年 4 月 20 日

各国の美術館における美術と絵本、美術を子どもに紹介するための本の調査。市販されている絵本の中の美術の扱いに関する調査のため。

・清水 健太郎 助手 通信教育課程研究室

ペルー、ブラジル、アメリカ

平成 17 年 3 月 25 日～平成 17 年 4 月 5 日

「自然界が創り出した造形」、「古代の人類により創り出した造形」。これらを直接体感、実感することで、今後の自主制作に幅と深み、そして新しい表現への手がかりを探る。

・関根 昭太郎 助手 工芸工業デザイン学科

イタリア

平成 17 年 3 月 31 日～平成 17 年 4 月 30 日

イタリアにおける絵付け陶器の調査と視察。イタリア美術の歴史と現代の動向を知る。

・小川 明日香 助手 映像学科

南アフリカ共和国、モロッコ、チュニジア、スペイン、イタリア

平成 17 年 3 月 19 日～平成 17 年 4 月 28 日

映像素材、撮影、遺跡・美術館視察

・井上 智史 助手 通信教育課程研究室

スイス

平成 17 年 3 月 20 日～平成 17 年 3 月 30 日

・「バーゼルスクールオブデザイン」(タイポグラフィのカリキュラムなど)見学

・スイスの美術館・建築などの見学

・木島 孝文 助手 日本画学科

スペイン、イタリア

平成 17 年 3 月 31 日～平成 17 年 4 月 27 日

旧石器時代の洞窟壁画、またゴシック、ルネサンス期におけるフレスコ技法、テンペラ技法による壁画芸術の研究。西欧文化圏における価値観、美意識の考察。これらを通じ、今後の自主制作の質の向上を図る。

・加藤 賢策 助手 視覚伝達デザイン学科

スペイン、オランダ、ドイツ

平成 17 年 3 月 31 日～平成 17 年 4 月 24 日

ヨーロッパにおける、メディアアートおよびプライベートメディア／ソーシャルメディアの状況について視察する。

・根間 太作 助手 建築学科

中東、バルカン諸国、東欧諸国

平成 17 年 3 月 31 日～平成 17 年 5 月 30 日

中東アジア～ヨーロッパ(EU 非加盟国および EU 加盟申請国を中心)におけるグラフィックおよび建築デザインの歴史の動向を探る。

・鈴木 興 助手 油絵学科

ドイツ

平成 17 年 3 月 31 日～平成 17 年 4 月 29 日

ドイツにおける現代美術の視察

研究活動と研究環境

資料6 平成14年度から平成16年度までの科学研究費補助金に採択された研究

○平成14年度新規

・基盤研究(C)(1)

研究代表者：廖赤陽教授

研究課題：市場・社会と国家の間－福清幫ネットワークの形成と日本社会経済の変遷

○平成14年度継続

・基盤研究(B)(1)

研究代表者：源愛日児教授

研究課題：指物（指付け技法）の変遷過程と歴史的木造架構の類型化に関する研究

○平成15年度新規

・基盤研究(B)(1)

研究代表者：玉蟲敏子教授

研究課題：江戸時代における「書画情報」の総合的研究－『古画備考』を中心に－

○平成15年度継続

・基盤研究(B)(1)

研究代表者：源愛日児教授

研究課題：指物（指付け技法）の変遷過程と歴史的木造架構の類型化に関する研究

・基盤研究(C)(1)

研究代表者：廖赤陽教授

研究課題：市場・社会と国家の間－福清幫ネットワークの形成と日本社会経済の変遷

○平成16年度新規

・基盤研究(B)(1)

研究代表者：朴亨國助教授

研究課題：韓国の浮彫形態の仏教集合尊像（四仏・五大明王・四天王・八部衆）に関する総合調査

○平成16年度継続

・基盤研究(B)(1)

研究代表者：源愛日児教授

研究課題：指物（指付け技法）の変遷過程と歴史的木造架構の類型化に関する研究

・基盤研究(C)(1)

研究代表者：廖赤陽教授

研究課題：市場・社会と国家の間－福清幫ネットワークの形成と日本社会経済の変遷

・基盤研究(B)(1)

研究代表者：玉蟲敏子教授

研究課題：江戸時代における「書画情報」の総合的研究－『古画備考』を中心に－

資料7 平成15年度及び平成16年度の委託研究費によるプロジェクト

○平成15年度

プロジェクト名	委託先	担当学科
アートサイト岩室温泉 2003	岩室村岩室温泉旅館組合	建築学科+空間演出デザイン学科
[I] プロジェクト	アイリスオーヤマ(株)	基礎デザイン学科+工芸工業デザイン学科
狭子空間 HUT-II<環具>の研究	トヨタウッドユーホーム	工芸工業デザイン学科+空間演出デザイン学科
花と緑と生活環境	森下(株)	視覚伝達デザイン学科+工芸工業デザイン学科
[N] プロジェクト[近未来の新しいカーライフの提案]	日産自動車(株)	工芸工業デザイン学科+基礎デザイン学科
伊藤熹朔の映像空間設計の研究	日本放送協会	空間演出デザイン学科
若者、ウィスキーと出会う	サントリー(株)・(株)博報堂	視覚伝達デザイン学科

○平成16年度

プロジェクト名	委託先	担当学科
INAX との産学合同授業「水回り空間計画」	INAX(株)	工芸工業デザイン学科
[I] プロジェクト[そうじライフ]	アイリスオーヤマ(株)	基礎デザイン学科+工芸工業デザイン学科
[X]プロジェクト[新しいリストワッチの提案]	カシオ計算機(株)	工芸工業デザイン学科+基礎デザイン学科+デザイン情報学科
伝統と越境—とどまる力と越えいく流れのインタラクション—	日本学術振興会	柏木博 (本学教授)
伊藤熹朔の映像空間設計の研究	日本放送協会	空間演出デザイン学科
アートサイト岩室温泉 2005	岩室温泉旅館組合+岩室村観光振興課	基礎デザイン学科
府中市彫刻のあるまちづくり事業作品管理作業委託	府中市	彫刻学科
ブロンズ胸像彫刻「松前重義先生像」保存修復作業	東海大学	彫刻学科

資料8 平成14年度から16年度までの出版助成の対象者

○平成14年度

- ・保坂陽一郎 教授（建築学科）[平成16年3月定年退職]
「建築の構成—保坂陽一郎作品録」（株）建築資料研究社
- ・向井周太郎 教授（基礎デザイン学科）[平成15年3月定年退職]
「かたちの詩学」
- ・青木正夫 教授（視覚伝達デザイン学科）[平成15年3月定年退職]
「青木正夫作品集『構造考 線が線であるために』」

○平成15年度

- ・佐藤健一郎 教授（一般教育研究室）[平成15年3月選択定年退職]
「日本の古典芸能」
- ・田村善次郎 教授（芸術文化学科）[平成16年3月定年退職]
「ネパール周遊記」
- ・小久保明浩 教授（教職課程研究室）[平成16年3月定年退職]
「塾の水脈」

○平成16年度

- ・網戸通夫 教授（基礎デザイン学科）[平成17年3月選択定年退職]
「デザインの原景 1944-2004」